

特 257  
557

鐘 苑 卷 正 尚  
魁 月 絹 字 山  
三

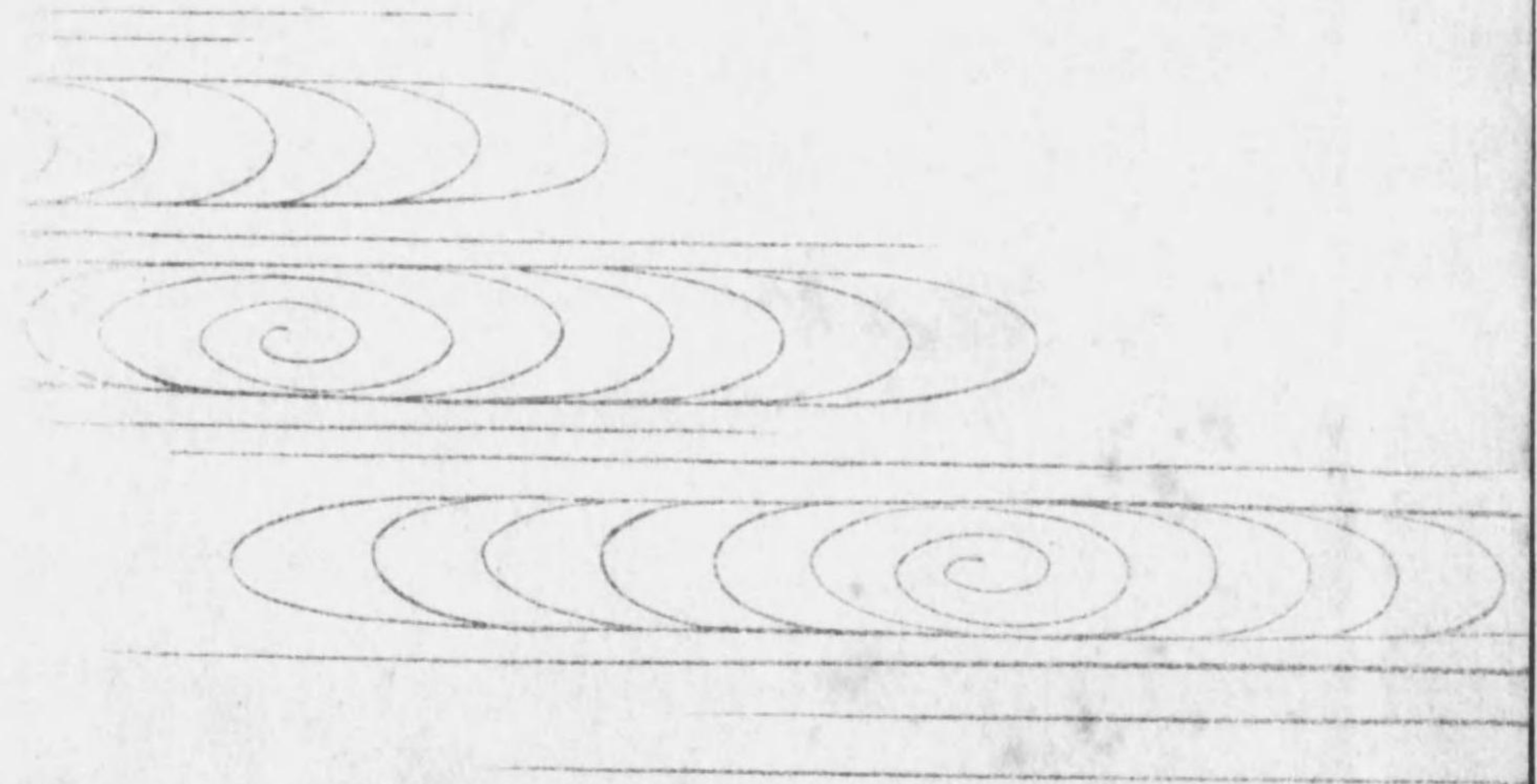


始





特257  
557







關風元安作

嵐山

梗概

大和吉野の櫻は名花なれども、道遠くして屢々行幸もなり難ければとて、これを嵐山に移し植ゑしめ給ひしが、この春の花の様や如何にと、一官人に仰せて見しめ給ふ。勅使(ワキ)即ち嵐山に到れば、老人夫婦(前シテ、前ツレ)來り、木蔭を掃き清め、花に向ひて禮拜渴仰せり。勅使怪しみて、如何なる者ぞと尋ねれば、我等はこの山の花守なるが、この櫻は吉野千本の櫻を移し置かれしものなれば、木守(木守)の神も折々こゝに影向し給ふ故に、かくは渴仰するなりと答へ、夜に入りてなほも奇瑞の現るゝを待ち給へ、我等はその二神なりと告げて、夕雲にうち乗り、南の方に飛び去る。(中入)夜に入りて、果して木守、勝手(後ツレ)の二神(後ツレ)現れ出で、神樂を奏し給ふほどに、南の方より吹きくる風の異香薫じ、瑞雲たなびき、金色の光輝き渡りて、藏王權現(後シテ)來現し給ひ、花に戯れ梢に翔つて、國土守護衆生利益の誓約を示し給ふ。

謡ひ方

初能の内にも花やかなる物にて、總じてさらりとしたる曲なれば淡みなく謡ふべし。  
△シテ 眞の一聲の出は閑かに調子を抑へて出で餘り重くならぬ様に、サシは氣を變へさらりめに、下歌上歌は閑かに、ワキとの掛合は落着いて閑かに謡ふ。  
△後シテ 威風凛々と手強く乗つて謡ひ出し、地との掛合は確かりと壯嚴に謡ふ。  
△ツレ さらりと謡ふなれど姦なれば注意して謡ふべし、尤もシテとの連吟はシテの調子に従ふ。  
△後ツレ 木守勝手の神なり。素謡の時は一人にて謡ふ事もあり、又子方にする事もあり、さらりと謡ふなれど、下り羽なれば拍子にはづれぬ様に謡ふ。  
△ワキ 素謡にては一人にて謡ふ。勅使なれば位を持ち、確かりと重くならぬ様引立て、謡ふ。シテとの掛合はさらりと謡ふべし。

曲柄 一番目 初能 神楽物  
三 月 四 日 級  
所 山城國葛野郡嵐山





△地 初同下歌はさらりと出で、上歌は朗かに引立て、花やかに「いざ／＼花を守らうよ」とゆるめ「春の風は」より元へ戻しさらりと花やかに留の「行きにけり」ととくと閉め「三吉野の」と下り羽にて寛たりと花かに「萬代と」より氣を替へ大きくたつぷりと「千早振」と強吟にて閉めて「神樂の鼓」より乗つて勢を付けさらり「不思議や」より乗らずさらりと進んで「來現かや」と大きく「和光利物の」とたつぷりと手強く、以下シテとの掛合もさらりと勢を付け走らぬ様に誦ふべし。

能の異式(小書)

白頭 — 後シテを白頭にて勤む、位が重くなるなり。  
祝言の式 — 翁附能の最終に、後半のみを演ずるなり。此の時は白頭になる。

語釋

吉野の山の種とりし — 龜山天皇の御時に、吉野の櫻を移植せさせ給ひしをいふ。續古今集に載す、龜山天皇の御製に、「春毎におもひやられし三吉野の花は今日こそ宿に咲きけり」とあり。

千本の櫻 — 吉野山の七曲坂といふを過ぐれば、見渡す限り皆櫻樹なり、俗にこれを一目千本といふ。  
花は雲かと詠めける — 古今集の序に「春のあした吉野山の

櫻は人丸が心には雲かとのみなんおぼえける」と載たるを引く。

其歌人の — 柿本人麿をさす。  
御影山 — 奈良縣大和高市郡にあり。

戸無瀬 — 大堰川の流れなり。龜山に寄りたる急流を龜尾瀬と云ひ、嵐山に寄りたる方を戸無瀬瀧といふ。

木守 — 吉野山の山中に鎮座の神、是はもと水分と書き、みくまりの神と稱へて、雨など司る神なるが、訛りてみくもりとなり、又遂にこもりとなりしなり。木守、子守などの意に取らなしたるなり。

勝手 — これも同じ山中に鎮座の神、祭神は受靈命なり。  
さしもこそ厭ふ憂き名の — 新千載集に載す、前關白の歌に「さしもこそいとふ浮名の嵐山花のところといかでなりけん」とあり。

笹の岩屋 — 吉野山の奥、御嶽にあり。新古今集第二十卷釋教歌に載す、日藏上人の歌に、御嶽の笹の岩屋に籠りてよめると同書して「じやくまくの苔の岩戸の静けきに涙の雨の降らぬ日ぞなき」とあり。歌意は、深山の苔蒸す岩屋は實に幽靜なれば自然に佛心に接近するを得て感謝する意なるが、じやくまくは寂寥なるべく、即ち静けきと重複の嫌なきかと思はる。要するに神聖の趣きを詠みし歌なるべし。

葉摘の川 — 吉野川の川上にあり。萬葉集に「吉野なる夏箕川の川流に鴨ぞ鳴くなる山陰にして」とあり。

眞如の月 — 唯識論に「眞謂眞實顯、非ニ虛妄ニ如謂如常表、無ニ變易」と説けり。去れば一切萬法の依るところの實體實性にして、永世不變不易なる眞理を名づけて、眞如といふ。この眞如は、一切衆生成佛得道の標的にして、吾曹迷妄の暗を破する力用を有するが故を以て、これを闇黒を照す蒼穹の天月に比し、眞如の月といふなり。

五濁のごり — 五濁とは、一には劫濁とて天災、疫病等絶えず起りて時節の悪しきこと、二には見濁とて衆生、惡見を逞ふし、是を非とし、非を是とする等顛倒の見解盛んになれること、三には煩惱濁とて衆生、食欲、瞋恚、愚癡等の三毒煩惱の興盛なること、四には衆生濁とて、衆生の果報漸く衰へ、身體矮弱、精神癡鈍となれること、五には命濁とて、衆生の壽命漸次短天となれること是なり。楞嚴經に「譬如清水投之沙土、土失留碍水亡、清潔泊然渾濁由是此五濁、理水亡、清」とあり。以て知るべし。

奥竹の夜 — よとは竹の節と節との間をいふ。  
西山 — 嵐山は京都の西方なればいふ。  
南の方 — 嵐山より吉野山の方角は南なればいふ。  
色々の花こそまじれ白雪の — 雪の中に籠りて色々の花が見

ゆるといふ意。天地一白の花盛りを形容せし詞なり。

青根が峰 — 吉野山の内西河村の西南にあり。萬葉集に「三芳野の青根が峰の苔筵たれか織りけん経緯なし」とあり。

小倉山 — 嵐山の北にあり、嵯峨二尊院の上の山をいふ。  
龜山 — 小倉山の東にあり、此の山と嵐山との間を大堰川流るゝなり。

藏王權現 — 吉野金峰山に鎮座の神。今嵐山の奥にも小祠あり。

和光利物の御姿 — 是より神の御像に現はれたる形をいふ。  
塵添壺養鈔に「昔役行者度生利益のために、金峰山に一千日籠り居て、生身の像を見奉らんと肝膽を碎きて祈り給ふに、金剛藏王まづ柔和忍辱の相を顯はし、地藏菩薩の形にて地より湧出し給ひたりしを、小角首を振つて未來惡生の衆生を濟度し給はんとらば、左様の御形にては叶ふべからずと申されければ、則ち伯耆の大山へ飛び還らせ給ひぬ、其後大勢忿怒の姿を顯はして湧現し給ひ、右の御手には三鉢を握り臂を怒らし、左手に五指開いて腸を押へ、三眼明かに忿つて魔障降伏の相を示し、兩脚あげ垂れて天地經緯の徳を顯はし給へり」とあるを考比してさるとるべし。和光利物は神の光を人間界に交へて萬物を救ひ利することにて超世的徳光を和けて世俗の塵埃に同する謂なり。老子經に「和其光、同其塵」と



いひ、摩訶止観に、「和光同塵結縁之初八相成道以論其終亦名爲「化亦名爲」應」と説けるも皆同一なり。玉葉集に載す、皇太后宮太夫藤原俊成の歌に「山櫻ちりにひかりをやはらげてこの世に咲ける花にやありけむ」と詠めるも、この和光利物の意なり。

間狂言

吉野明神の末社、嵐山の花の謂れを語り、勅使を慰めんとて舞を舞ふ。

かやうに候者は。大和國吉野明神に仕へ申す末社の神にて候さるほどに珍らしからぬ御事なれども。先づ我朝は天地開闢より神國なれば。靈佛靈社國々在々に地を鎮め給ひ。佛法繁昌のめでたき御代にて御座候。さればそれに付き。昔よりこの日の本に於て。花の名所多しと申せど。この三吉野の櫻といへば。世に隠れなき名木なれば。即ち散覽ありたく思し召さるれど。都より餘り遠路にて。御幸なさるゝ事もいかゞなれば。千本の花の種を取り寄せられ。それより都の西。嵐山に悉く植ゑ置き給ひし故。花盛りには眺めたく思ひ。國々在々所々よりも毎日老若男女。共にわれ劣らじと貴賤群集致す。殊更一條の院に仕へ御申しある臣下。唯今勅使にこれへ御参詣のきさみ。木守勝手神明も老人夫婦と現じ。さま／＼言葉交し。われは千本の櫻の守りの神と。名乗りも敢へず歸

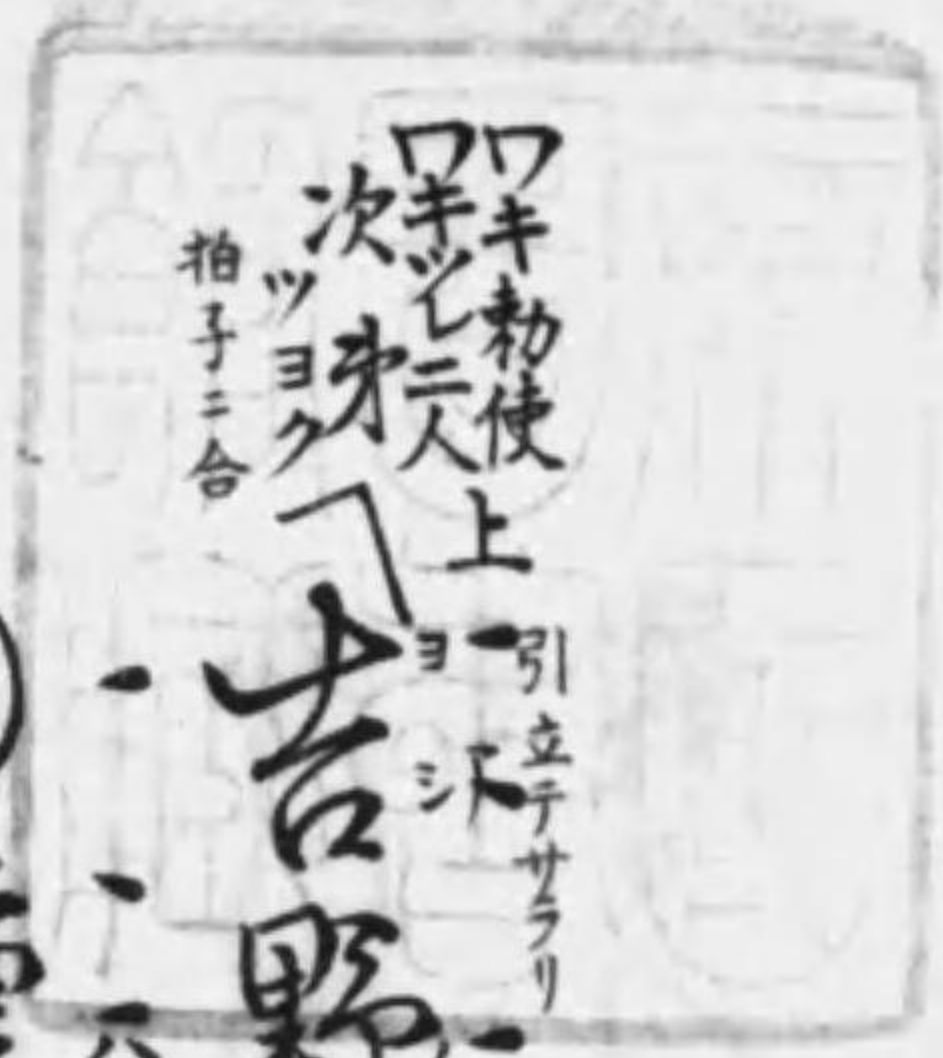


り給ふが。拙者には何にてもあれ一曲仕り。客人を慰め申せとあるほどに。とるものも取り敢へず罷り出た。先づあれへ参らう。誠にかやうに治まる御代なればこそ。客人の御下向なれ。この度見物仕らずば又見る事はをりやるまい。しかしどこもとにぞ。さればこそこれををりやるよ。先づあれへ参らう。これは當社明神に仕へ申す末社なるが。この所への参詣めでたう存する。こゝもとに逗留のうち。何の慰めもなうてはいかゞな。面白くはなくとも何ぞ一曲致さうするか。やあ。あゝでおりやる。尤もさすが客人で御座るぞ。何ぞ一曲をと申したれば。よからうと思はるゝ心やらん。ほつくりほつくりとうなづかれたが何をせうぞ。いや思ひ出だした。この前一さし舞うた事のある間。急いでこれを奏でうする。謡「めでたかりける時とかや。あら／＼めでたや／＼な。かゝるめでたき折からなれば。末社の神も喜び勇み。これまでなりとて末社の神は。これまでなりとて末社の神は。三吉野さしてぞ歸りける。

装束附(嵐山)

作物	後シテ	後ツレ	後ツレ	前シテ	ツレ	ワキツレ	ワキ	
	藏王權現	勝手明神	木守明神	花守ノ厨	花守ノ姥	臣下二人	勅使	
等	赤地半切拾狩衣 繡紋腰帶 神扇	面、大飛出 唐冠 赤頭 色鉢巻 襟縹色又ハ紺 着附段厚板	紫長絹 縫腰帶 爪紅扇	襟赤 着附摺箔 緋大口又ハ白大口	面、連面 黒垂 鬘 鬘帶 天冠	面、邯鄲男 透冠 黒垂 黒地鉢巻 襟黄 着附厚板 白大口	着附厚板 白大口 赤拾狩衣 繡紋腰帶 扇	大臣烏帽子 萌黄上頭掛 白大口 拾狩衣 繡紋腰帶 扇
櫻枝	櫻立臺			面、小牛尉 尉髮 襟淺黄又ハ禰 着附小格子厚板 白大口	面、姥 姥鬘 無紅鬘帶 襟黄 着附摺箔 無紅唐織 縷水衣	着附厚板 白大口 赤拾狩衣 繡紋腰帶 扇		





嵐山

素菰座席順  
ワシツ後ッ  
キラレレ

ワキ勅使上ヨシ  
引立テサラリ  
次手シテ天  
拍子ニ合  
吉野の花の種とり  
の種とり  
嵐山に急がん

早詞 確カリ

ワキ名素



そもそもこれは當今に仕へ奉る  
臣下なりさそも和州吉野の子本  
の梅は聞しめし及ばれたる名花  
なれども遠方十里の外なれば花見

嵐山



の序幸かなひ給はず。さるにより  
 千本の桜を嵐山に移し置かれ  
 ての間この春の花を見ておれとの  
 宣旨を蒙り。唯今嵐山へと急ぎぬ  
 都にはげにも嵐の山桜。げにも  
 嵐の山桜。千本の種はこれぞとて  
 尋ねて今ぞ三吉野の花は雲かと

三人道行上ら

詠めける。その歌人の名残ぞとよそ  
 めになればなほしもの眺め妙なる。  
 景色かな眺め妙なる景色かな  
 急ぎの程にこれにはや嵐山に着きて  
 心静かに花を眺めうするにて  
 花守の住むや嵐の山桜。雲も上  
 なき梢かな。千本に咲ける種なれ

ワ半詞

ツレ姪二人上ら  
 眞一セイ  
 拍子合ハズ





シチサシ

シチサシ上

二人<sup>シチサシ</sup> 柳<sup>シチサシ</sup> 春も久<sup>シチサシ</sup> 一<sup>シチサシ</sup> 甲<sup>シチサシ</sup> 上<sup>シチサシ</sup> 氣色<sup>シチサシ</sup> かな<sup>シチサシ</sup>  
 されは<sup>シチサシ</sup> 予<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> 嵐<sup>シチサシ</sup> 山<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> 花<sup>シチサシ</sup> を<sup>シチサシ</sup> 守<sup>シチサシ</sup> る<sup>シチサシ</sup> 夫<sup>シチサシ</sup> 婦<sup>シチサシ</sup>  
 の<sup>シチサシ</sup> 者<sup>シチサシ</sup> に<sup>シチサシ</sup> て<sup>シチサシ</sup> ひ<sup>シチサシ</sup> な<sup>シチサシ</sup> り<sup>シチサシ</sup> 二<sup>シチサシ</sup> 人<sup>シチサシ</sup> 遠<sup>シチサシ</sup> 万<sup>シチサシ</sup> 十<sup>シチサシ</sup> 里<sup>シチサシ</sup>  
 の<sup>シチサシ</sup> 外<sup>シチサシ</sup> な<sup>シチサシ</sup> れ<sup>シチサシ</sup> ば<sup>シチサシ</sup> 花<sup>シチサシ</sup> 見<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> 幸<sup>シチサシ</sup> な<sup>シチサシ</sup> き<sup>シチサシ</sup> ま<sup>シチサシ</sup> に<sup>シチサシ</sup>  
 名<sup>シチサシ</sup> に<sup>シチサシ</sup> あ<sup>シチサシ</sup> ぶ<sup>シチサシ</sup> 吉<sup>シチサシ</sup> 野<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> 山<sup>シチサシ</sup> 栴<sup>シチサシ</sup> 子<sup>シチサシ</sup> 本<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> 花<sup>シチサシ</sup>  
 の<sup>シチサシ</sup> 種<sup>シチサシ</sup> と<sup>シチサシ</sup> り<sup>シチサシ</sup> て<sup>シチサシ</sup> 予<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> 嵐<sup>シチサシ</sup> 山<sup>シチサシ</sup> に<sup>シチサシ</sup> 植<sup>シチサシ</sup> 置<sup>シチサシ</sup> け<sup>シチサシ</sup> れ<sup>シチサシ</sup>  
 後<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> 世<sup>シチサシ</sup> ま<sup>シチサシ</sup> ぐ<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> 例<sup>シチサシ</sup> と<sup>シチサシ</sup> か<sup>シチサシ</sup> や<sup>シチサシ</sup> 此<sup>シチサシ</sup> れ<sup>シチサシ</sup> と<sup>シチサシ</sup> ても<sup>シチサシ</sup>

○小強

君<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> 惠<sup>シチサシ</sup> み<sup>シチサシ</sup> か<sup>シチサシ</sup> な<sup>シチサシ</sup> げ<sup>シチサシ</sup> に<sup>シチサシ</sup> 頼<sup>シチサシ</sup> も<sup>シチサシ</sup> 一<sup>シチサシ</sup> や<sup>シチサシ</sup> 市<sup>シチサシ</sup> 影<sup>シチサシ</sup>  
 山<sup>シチサシ</sup> 治<sup>シチサシ</sup> ま<sup>シチサシ</sup> る<sup>シチサシ</sup> 市<sup>シチサシ</sup> 代<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> 春<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> 空<sup>シチサシ</sup> 〇<sup>シチサシ</sup> さ<sup>シチサシ</sup> も<sup>シチサシ</sup> 妙<sup>シチサシ</sup>  
 な<sup>シチサシ</sup> れ<sup>シチサシ</sup> や<sup>シチサシ</sup> 九<sup>シチサシ</sup> 重<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> さ<sup>シチサシ</sup> も<sup>シチサシ</sup> 妙<sup>シチサシ</sup> な<sup>シチサシ</sup> れ<sup>シチサシ</sup> や<sup>シチサシ</sup> 九<sup>シチサシ</sup>  
 重<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> 内<sup>シチサシ</sup> 外<sup>シチサシ</sup> に<sup>シチサシ</sup> 通<sup>シチサシ</sup> 入<sup>シチサシ</sup> 花<sup>シチサシ</sup> 車<sup>シチサシ</sup> 轆<sup>シチサシ</sup> も<sup>シチサシ</sup> 西<sup>シチサシ</sup> に<sup>シチサシ</sup>  
 め<sup>シチサシ</sup> ぐる<sup>シチサシ</sup> 日<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> 影<sup>シチサシ</sup> ゆ<sup>シチサシ</sup> く<sup>シチサシ</sup> 雲<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> 嵐<sup>シチサシ</sup> 山<sup>シチサシ</sup> 〇<sup>シチサシ</sup> 戸<sup>シチサシ</sup> 無<sup>シチサシ</sup>  
 瀬<sup>シチサシ</sup> に<sup>シチサシ</sup> 落<sup>シチサシ</sup> つ<sup>シチサシ</sup> る<sup>シチサシ</sup> 白<sup>シチサシ</sup> 波<sup>シチサシ</sup> も<sup>シチサシ</sup> 散<sup>シチサシ</sup> る<sup>シチサシ</sup> か<sup>シチサシ</sup> と<sup>シチサシ</sup> 見<sup>シチサシ</sup> ゆ<sup>シチサシ</sup> る<sup>シチサシ</sup>  
 花<sup>シチサシ</sup> の<sup>シチサシ</sup> 籠<sup>シチサシ</sup> 盛<sup>シチサシ</sup> り<sup>シチサシ</sup> 久<sup>シチサシ</sup> き<sup>シチサシ</sup> 氣<sup>シチサシ</sup> 色<sup>シチサシ</sup> かな<sup>シチサシ</sup> 盛<sup>シチサシ</sup> り<sup>シチサシ</sup>

嵐山

三



中用ルル心久キきキ氣キ色シキかな。不思議フシギやなこれ  
 なる老人ラウジンを見れば花に向ひ渴カツ作サク  
 の氣色キシキ見えたりおことはいかなる  
 人やらんシテウケテ関カニいざんぼこれハ嵐山ハの花守モリ  
 にもふ。又嵐山ハの千本チホの橋ハは皆神ミヤ  
 木ボにてハ程ハに花ハに向ひ渴カツ作サク申しハ  
ワキカニツテそも嵐山ハの千本チホの橋ハの神木カミキ

たるべき謂イハれはいかにシテげハにハ不審フシン  
 は御理ミツ名ナにあひ吉キチ野ノの千本チホの橋ハを。  
 移ウツ置ツかれしその故コト人ヒトこそ知チ  
 らねをりハは木守モリ勝手カテの神カミ  
ワキ上げハにハやハもハこそハ厭イふハ憂ウきハ名ナ  
サラリの嵐山ハとハりハわハきハ花ハのハ名ナ所トは。



何ぞて定め置まけるぞ シテ抑ヘテ雨カニ 公それこそ

なほも神慮なれ。名にあは花の奇

持をも。顯さんとの御惠み シテカレ上 げに頼も

しや清影山靡ま治まる三吉野の

神風あらばおのづから名こそ嵐

の山なりとも 下歌同 中サナリ 花はよも散らじ。

風にも勝手木守もそ夫婦の神

はわれぞか カヘテ 音たかや山嵐山人に

な知らせ給ひそ 拍子ニ合 笠の岩屋の

松風は笠の岩屋の松風は 元ハ長シ 實相

の花盛り開くる法の聲立て今

嵐の山梅菜摘の川の氷清く真

如の月の澄める世に五濁の濁りあ

りとも ヤラ 流れば大堰川その水上は

〇〇 獨吟  
切定 雜子





夕トも、仲元へ戻シ盡ツまシくシいい花を守らり  
 よいいい花を守らりよ春の風は  
 空に満ちて春の風は空に満ちて  
 庭前の木を切るも神風にて  
 吹まかへさば妄想の雲も暗れぬべし  
 千本の山樺のどけき嵐の山風  
 は吹くも枝は鳴らずどその日も

すでに吳竹の夜の間を待たせ  
 給べし明日も三吉野の山樺立  
 ちらる雲にうち乘りて夕陽残る  
 西山や南の方に行きにけり南の  
 方に行きにけり○中入來序間  
 三吉野の三吉野の千本の花の種  
 植ゑて嵐山あらたなる神遊びぞ

○小謡  
下り羽上  
ツレ出

嵐山

下



後上勝手不<sup>朗カニ</sup>



音振が幸らに

めでたまきこの神遊びぞめでたまき  
 いろいろの<sup>同 前受カ</sup>いろいろの<sup>不又元カ</sup>花こそまじれ  
 白雪の<sup>モリ</sup>木守勝手の<sup>モリ</sup>恵みなれや松  
 の色<sup>ツ天</sup>青根が<sup>イ</sup>峯<sup>イ</sup>そに<sup>同 朗カニ</sup>青根が<sup>イ</sup>峯  
 くに<sup>イ</sup>小倉山も<sup>イ</sup>見えたり<sup>イ</sup>向ひは<sup>イ</sup>嘘  
 娥の<sup>イ</sup>原下は<sup>イ</sup>大堰川の<sup>イ</sup>岩根に<sup>イ</sup>波かる  
 飛山も<sup>イ</sup>見えたり<sup>イ</sup>萬代と<sup>イ</sup>萬代と<sup>イ</sup>

雑せ<sup>ハ</sup>雑せ<sup>ハ</sup>神遊び<sup>イ</sup>千早ぶる<sup>ハ</sup>天女舞<sup>カ</sup>  
 神樂の<sup>イ</sup>鼓聲<sup>イ</sup>澄みて<sup>イ</sup>神樂の<sup>イ</sup>鼓聲<sup>イ</sup>

同<sup>ハ</sup>拍合<sup>イ</sup>ヤア

澄みて<sup>イ</sup>羅維<sup>イ</sup>綾の<sup>イ</sup>袂<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>ひる<sup>イ</sup>が<sup>イ</sup>へ<sup>イ</sup>翻<sup>イ</sup>す  
 舞樂の<sup>イ</sup>秘曲<sup>イ</sup>も<sup>イ</sup>度<sup>イ</sup>重<sup>イ</sup>なり<sup>イ</sup>て<sup>イ</sup>感<sup>イ</sup>應<sup>イ</sup>  
 肝に<sup>イ</sup>銘<sup>イ</sup>する<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>り<sup>イ</sup>から<sup>イ</sup>不<sup>イ</sup>思<sup>イ</sup>議<sup>イ</sup>や<sup>イ</sup>南<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>  
 方<sup>イ</sup>より<sup>イ</sup>吹<sup>イ</sup>き<sup>イ</sup>くる<sup>イ</sup>風<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>異<sup>イ</sup>香<sup>イ</sup>薰<sup>イ</sup>ト<sup>イ</sup>  
 て<sup>イ</sup>瑞<sup>イ</sup>雲<sup>イ</sup>た<sup>イ</sup>な<sup>イ</sup>び<sup>イ</sup>き<sup>イ</sup>金<sup>イ</sup>色<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>光<sup>イ</sup>輝<sup>イ</sup>き<sup>イ</sup>



○仕舞 柏子三合  
早笛  
後シテ  
藏王権現



わたらはは。藏王権現の素現かや  
和光利物の御姿和光利物の御姿  
われ本覺の都を出て分限同居の  
塵に交はり金胎两部の一足を  
ひつぎげ悪業の衆生の苦患を  
助けとて又虚空に浄手をあげ  
ては忽ち苦海の煩惱を拂ひ

○祝言小謡



悪魔降伏の青蓮のまなりに  
光明を放つて國土を照らし衆生を  
守る。誓ひを願ふ。本守勝手藏王  
権現同體異名の姿と見せて  
おのおの嵐の山に攀ぢらのぼり。  
花に戯れ指にかけつて。さながら  
くも。金の峯の光も輝く千本



源義経は平家討滅の大功を建てたるも、梶原の讒言によりて  
 兄頼朝に疑はれ、空しく京に留まれる處に、土佐坊正尊鎌倉  
 より密かに上洛す。義経則ちその密計を察して、武藏坊辨慶  
 (ワキ)をしてこれを館に召さしむ。正尊(前シテ)已むを得  
 ず辨慶に伴はれて義経の前に出で、義経の難詰を受けて、こ  
 の度の上洛は熊野参詣の序なりと偽り、終に自筆の起請文を  
 認めて、異心なき旨を誓ふ。義経等もとより虚言とは察した  
 れども、當座の器用に感じて盃を與へ、靜(子方)も立ちて  
 一さし舞ふ。かくて正尊は一先その宿所に歸り、義経も寢所  
 に入る。(中入)  
 辨慶は正尊の宿所に人を遣はして、將に攻め寄せんとする氣  
 色を知り、義経以下出でて敵を待つ程もなく、正尊(後シテ)  
 姉和光景(後ツレ)その他多勢の軍兵(立案)を率ゐて攻め  
 来る。辨慶は江田源三、熊井太郎(ツレ)等と共に門外に打  
 つて出で、姉和以下の軍兵を斬り殺し、正尊を生捕りにす。

正尊

彌次郎長俊作

曲柄 四、五番目(略二番目)  
 季節 九月  
 稽古 三歌  
 所 京都市堀川東油小路西

梗概

源義経は平家討滅の大功を建てたるも、梶原の讒言によりて  
 兄頼朝に疑はれ、空しく京に留まれる處に、土佐坊正尊鎌倉  
 より密かに上洛す。義経則ちその密計を察して、武藏坊辨慶  
 (ワキ)をしてこれを館に召さしむ。正尊(前シテ)已むを得  
 ず辨慶に伴はれて義経の前に出で、義経の難詰を受けて、こ  
 の度の上洛は熊野参詣の序なりと偽り、終に自筆の起請文を  
 認めて、異心なき旨を誓ふ。義経等もとより虚言とは察した  
 れども、當座の器用に感じて盃を與へ、靜(子方)も立ちて  
 一さし舞ふ。かくて正尊は一先その宿所に歸り、義経も寢所  
 に入る。(中入)  
 辨慶は正尊の宿所に人を遣はして、將に攻め寄せんとする氣  
 色を知り、義経以下出でて敵を待つ程もなく、正尊(後シテ)  
 姉和光景(後ツレ)その他多勢の軍兵(立案)を率ゐて攻め  
 来る。辨慶は江田源三、熊井太郎(ツレ)等と共に門外に打  
 つて出で、姉和以下の軍兵を斬り殺し、正尊を生捕りにす。

謡ひ方

起請文と云へる小書ある時は重き習物となるなれど、起請文  
 の小書なき時は起請文を抜き、單に平物となるなり。總じて  
 さらりと強みを含みて謡ひ、餘り心持を多くするは悪し。  
 △シテ 隠謀を包みて權策を弄するシテなれば、落着をつけ  
 穩やかに謡ひ出し、ワキとの問答も内に手強く外に出ぬ様に  
 「土佐坊も」と大く地へ渡し、義経との掛合も閑かに落着いて  
 「あら勿體なや」とワキへ大きくかゝつて以下手強く確かりと  
 「これは御説にて」と氣を全然變へて閑かに落着き「唯今御目  
 にかくべし」と氣を變へ確かりと謡ふ。  
 △後シテ 大きく堂々と勢を込めて出で、以下力の抜けぬ様  
 に謡ふ。  
 △ツレ義経 品ありて威を持ち確かりとさらりと謡ふ。  
 △子方 さらりと謡ふ。  
 △後ツレ姉和 勢ひよくさらりと手強く謡ふ。  
 △ワキ 辨慶なれば位重く雄大に謡ひ出し、名乗以下詞長け



れば文句に心付け、シテとの掛合はシテの位を取らぬ様に確かりと「いや／＼片時も」より手強く以下シテにかゝつて初同後の掛合は手強く「御説の如く」以下大きく勇壯に、中入後義經との掛合は謹んでさらりと、姉和との掛合は堂々と勢を付けて誦ふべし。

△地 初同は手強く確かりと出で「徒に」と閉め「成るともよしや」より運んで勢を付け「當座の席を」と大きく確かりと「元より虚言とは」とさらりめに確かりと出で「折節御前に」より氣を替へ弱吟にて浮きやかに「白雲かゝる」と寛たりと「よく／＼申せと」より引立て、晴やかに「申しけり」と留めは引かずに「義經是を召されつゝ」と確かりと、以下段々に勢を付けて進み「味方の勢は」と確かりさらりと以下段々と進み「薙刀やがて取直し」と閑かに出で返しよりさらりと勢を付け段々と進み「正尊是を」より氣を替へ乗つて勇壯にさらりと誦ふ。

△起請文 起請文は重習中傳にして、誦ひ出しは拍子に合はず、閑かに確かりと出で「上は梵天帝釋」より拍子に合ひ、凡て序破急と三段に分ち「金峯山」とゆるめ、是迄を序の位とし、以下破の位にて氣を變へ、大きく堂々と「殊には氏の神」とゆるめ、以下急の位にて運びを付け「正尊と讀上たり」と確かり誦ひとめる。「身の毛もよだちて書いたりけり」と

誦ふは、家元のみに限るなり、序破急といへども、殊に目立ちて變へるは宜しからず、漸次に其位になるなり、總じて粘らぬ様にさらりと誦ふべし、起請文を誦ふときは、題の左方へ小く(起請文)と書くなり。

### 能の異式(小書)

起請文 普通は起請文を抜きて誦ふなれど、起請文を入れる時はこの小書が入り、「自筆にこれを書きつけ御前に於て讀上ぐる」と文句替る。

翔入 「おめきさげんで戦ふたり」の跡、翔を入れる。

### 語釋

渡邊にて云々 渡邊は大坂府攝津國西成郡にあり。平家物語、土佐坊きられの事の條に「この春攝津國渡邊にて、逆權立てん立てじの論をして、大に欺かれしことを、梶原遺恨に思ひ、常に讒言して終に失ひけるとぞ」云々とあり。

土佐正尊 義經記、平家物語、源平盛衰記等には昌俊と記しあり。

遺例 病氣のこと。

否にあらざる稲舟の 古今集第二十卷東歌に「もがみ川のほればくだる稲舟のいなにはあらずこの月ばかり」とあり。歌意は、最上川を上るもあれば下るもある稲舟の様に否といふ事ではないが、此月中は故障がありて逢ふ事能はずとの意。

あらしごとく 兼て心に誓ひたること。

和僧 僧を呼ぶに最も恥かしめたる稱語、俗に貴様と云はんが如し。初めは多少敬意を表する意なりしも、後には反對の意となりしなり。

緩急 敬意を缺く意にて、野心などの義に使用せらる。

四大天王 多聞天、持國天、增長天、廣目天をいふ。

五道の冥官 地獄にありて、五道の衆生の罪を裁判する官人魔闍法王の臣。五道とは餓鬼、畜生、修羅、天上、人間の五つの世界をいふ。

泰山府君 又泰山府君に作る、奉教官と曰ひ判官とも名づく、其本地は地藏菩薩なり、天にありては補星、地にありては泰山府君といふ。六度集經、鬼子母經、法口經等に太山地獄見ゆ、府君は肉色にして左手に檀茶杖を持し、前に書卷を披き右手に筆をとりて書す、閻魔王は天子の如く、府君は尙書令錄の如し、又深沙大將と曰ふとも云へり。胎藏儀軌に「奉教官五道泰山府君」とあり。又古人傳に「深沙大王也」と、即ち人の魂魄を司る神とす。もと支那の道家より起れる名にして、道家は泰山の神を以て泰山府君といふ故なりとの説あり。

熊野三所 熊野なる本宮、新宮、那智をいふ。

金峯山 金峯山權現のこと。

八幡三所 應神天皇、神功皇后、玉依姫のこと。

阿鼻 地獄の一種なり、梵語阿鼻旨(アギーチ)無間と譯す、現世に上品の悪行をなしたるもの、來世に生れて苦痛を受くべき地獄にして、地藏菩薩本願經に、この地獄につきて

五種の無間を説きて曰く「一にこの獄に墮落せるものは、日夜苦を受け、間斷なきが故に時無間なり。二に一人の身も、大城内に徧滿し、多人の身もまた、然るが故に形無間なり。三に身を苦むるの器具、その數を盡して出で來り、間斷なきが故に受苦無間なり、四に男女、老幼、貴賤、人畜を問はず、罪業を犯せるものは皆悉く、此所に苦を受くるが故に、趣果無間なり。五にこの獄に墮落せるものは、一日一夜に萬死、萬生して、受苦の間斷なきが故に、命無間なり」と明かす。

今様 當時白拍子の誦ひし歌の名なり。一例を示せば「君を始めて見るときは千代も經ぬべし姫小松などいふ類なり。君が代は千代に 後拾遺集第七卷賀歌に載す、大江嘉言の歌に、三條院みこの宮と申しける時帯刀の陣の歌合に詠める。と詞書して「君が代は千代に一度るる塵の白雲かゝる山となるまで」とあり。

兼背長 鎧の種類。

白波とよそにや聞かん 白波は盜賊の異名なり。

### 間狂言

義經の召使ふ女、正尊の宿所の様子を探る。





作 物	立 衆	後 ツレ	後 シテ	前 シテ	ワ キ	ツ レ	子 方	ツ レ	装束 附 (正尊)	
										(シテ方) 人數定リ ナシ
文 細	直白 大口 白鉢卷 襟黄 着附厚板 太刀	直白 大口 側次 白鉢卷 襟黄 着附厚板 太刀	直白 大口 袈裟頭巾 半切 法被 襟黄 着附厚板 太刀	直白 大口 無地腰帶 小刀 扇	直白 大口 角帽子(沙門ニ着ル)襟黄 着附厚板 白大口 扇	兜巾 袴懸 着附厚板 白大口 納水衣 側次 縫紋腰帶 小刀 扇 刺高 數珠 (又ハ角帽子沙門 ニ着ル) 後ニ長刀	直白 大口 侍烏帽子 襟黄 着附厚板 白大口 掛直垂 縫紋腰帶 小刀 後ニ白鉢卷 太刀	白 大口 唐織坪折 着附厚板 後ニ太刀 扇	直白 大口 風折烏帽子 襟黄 着附厚板 白大口 長柄 縫紋腰帶 扇 太刀(子方持ツ)	

# 正尊

素張座席順

ワシ判靜  
キテ和官

早辨慶詞 手強クスラリ

これは西塔の武藏坊辨慶にてゆ。  
 さてもわが君判官殿は、鎌倉殿  
 より大名十人附け申されてゆども。  
 内々御中不和になり給ふにゆり。心を  
 合はせて一人づつは皆下りはてしゆ。  
 さても去年の心月本當義仲を





追討せしよりこの方度々平家と  
攻め落し。この春七ぼり果てし  
一天を鎮め四海を澄ます勸貴  
行はるべき處に渡邊にて梶原が  
逆艦の意見をと承引し給はざ  
りし遺恨により。わが君を讒奏  
申し。先兄弟の御中不和になり給ひ

て。又鎌倉より土佐正尊と申す者。  
昨日都へ上りて。わがこれわが君と  
狙ひ申さんためと聞しめされ。急ぎ  
召し連れて来れとの由談にて。わ程  
に。唯今土佐が旅宿へと急ぎいかに  
案内申し。判官殿より御使に武藏  
が参りて。い。正尊はこの屋のうちに



これは君の御使に  
以下



御入りゆか 三正尊寛ヤカニ強ク 武藏殿かやあら珍しや。  
 まづ此方へ御入りゆ 拜ウケテ 承りゆ サラリ まづ  
 以て御上りゆ ボ めてたうゆ。これは君  
 よりの御使にてゆ 止尊 止洛の由聞し  
 めし及ばれ。何とて 止尊 侍候はゆはぬ  
 ぞ。鎌倉殿の御意も聞し ボ めされ  
 たくゆ間。急いで御参り ボ あれゆの御

事にてゆ シテ用カニ強ク 宿願の子細ゆひて。  
 熊野冬詣の為にふと罷り ボ 上り  
 てゆ 昨日 京着 キヤ 仕りゆ ボ ども 路次 あり  
 違例 チヨオ 仕り サシ 散 サシ 々の事にてゆ程に。  
 今まで遅 チヨオ な チヨオ たり申してゆ ワキウケテ 委細承  
 りゆ。仰 チヨオ せ チヨオ な チヨオ ざる事 チヨオ な チヨオ れ チヨオ ども。唯今御  
 供申 チヨオ せ チヨオ どの御事 チヨオ にてゆ シテ寛タリ 畏 チヨオ つて



たゞ御供申さん



ミテカニル上  
ツヨク  
拍子ニ合ハズ

○小議

は少ども。今女コメ養ヤウ生シヤウを加へ必ず  
 伺候シコウ申しゆべワキいやいや片時ハシも  
 早く國の御事ミコトノミコトをば聞しめされたく  
 思オモしめせな。たゞ御供申さんと  
 是非シズといはせぬ武藏殿ムサシノミヤにワキも  
 剛ムコなるシテ出佐坊デサボウも上歌同否イナにはあらず  
 稲舟イナフネのカ否イナにはあらず稲舟イナフネの上ノれ

清き名のみと残さばや



ツレ判官サラリ

ば下クダる事コトもいハあラまシことも  
 後ノチらニなルとももすクや露ツキの身ミの消ク  
 えテ名ナのみミをシ残ノコさバや消クえてシ名ナ  
 のみミをシ残ノコさバやワキ詞ワカ確ツキカリニ  
 土佐ツクサ公キミ尊ミをシ連ツれテ去クりテゆ  
 此方ココへシ申スしユへワキ畏オソつテゆコなたカ  
 へシ去クられユへ判官サラリニいカにシ土佐坊ツクサボウ珍メしヤ



まじりたる御事



ところで何の為によりてあるぞ。鎌倉殿  
 より御文はなきか シテ用カニ さんびさうたる  
 御事も未だなくの間。御文は来らず  
 の言葉に申せといひしは。都に別の  
 子細なくの事。偏に御渡りの故と  
 思ひぬ。かまへてよく守護させ  
 給へとこそ申談ひつれ 判官カウチサリ 下りもさな



あらう義經討ちによりたる御使と  
 こそ覺ええたれ ワキカウチ確カリ 守護の如く大名  
 どもをさうとせられぬは。宇治勢田  
 の橋をも引き。都鄙の騒ぎとなつ  
 ては悪しかりなんと思ひぬ。土佐  
 坊上つて物詣でするやうにて。たば  
 かつて討ち申せとこそ仰せ付けられ



心づらぬ。和僧ワソウにおいてはこの法師ホフシ。  
 平なみの程を見すべきなり。申シテあら  
 勿體モツタイなや。たとひ人の讒言ゼンゴンにより。君  
 こそ仰せ出ださるゝも。申シテがに武  
 略リョクの武藏殿ムサシノミヤとあるまゝと申シテと  
 れてこそ。此ココ兄弟ケイテイの御申ミカシにものいひ  
 さがなまじ事コトあるまゝづけられ。まづ靜シヅカ

奉りし給へ武藏坊



まつて事コトのわけを。委ツカサしく聞き給へ  
 武藏坊ムサシノミヤこれは此ココ設セツにてゆゑも。何ナニに  
 よつて唯ただ今イマさる御事ミカシのゆへき。御ミカシが  
 宿願シュクガンの事コトのゆへに熊野クマノを詣ユキの為ために  
 罷シマりよがりてい。判官ハツカンが讒奏ゼンソウにより。  
 義經ヨシタカを鎌倉カマクラへも入れられず。道ミチより  
 追ツひ返マゼされし事コトはいかに。申シテの事コトは



起請文小書トキ  
以下下句カハル左ニ  
併前において讀み  
上ハカ

いかに書存のやらん身に於ては金々後  
息あらざる越起請文に書き表し  
唯今御目に懸くべしと  
席を遁れんと當座の席を遁れん  
と。土佐は聞うる文者にて。自筆に  
これを書きつけ。辨慶にこそは渡  
しけれ敬つて白す起請文の事。

カハ上弓  
拍子合ハズ

上歌同

拍子合

上は梵天帝釈。四天王閻魔法王五  
道の眞宮泰山府君下界の地には。  
伊勢天照大神を始め奉り伊豆箱  
根。富士浅間熊野三所金峯山王  
城の鎮守稻荷祇園賀茂貴船八幡  
三所松の尾平野總べて日本國の  
大小の神祇眞道諸。鷲か奉る。



起請文の中



口起請文小書トキ  
以下アカヘル左ニ  
読み上げたり

山魚

殊には氏の神(名位)全(キ切)く心尊討平に罷り  
 上る事(地)なり。この事偽りこれあらば  
 この誓言の誓詞を當り。來世は阿  
 鼻に随土罪せられんものなり。仍つて  
 起請文かくの如し。文治元年九月日  
 心尊と讀み上げたるは身の毛も  
 よだちて書いたりけり。同(カ)もとより

虚言とは思へども。文を揮うて書い  
 たる器用を感じ思しめし。御不興を  
 下さるを。御前に穢の禪師が  
 女に静といふ。白拍子。今様を謡ひ  
 つ。お酌に立ちて花かづら。かゝる  
 姿ぞたぐひなき。舞の袖(破掛中之舞三段)  
 子が静上(サナリ)君が代は。千代に一度。みるちりの(キ)

山魚



同上 カキテサラリ 白雲ラかる山ニなるまでニ山ニなる

まで山ニなるまでニ變らぬ契ニり

を頼む中のヤア變らぬ契ニりニ頼む中

の隔ニてぬ心ニは神ニぞ知るらんニよくよ

く申ニせと静ニに諫ニめられ土佐坊ニ法

前ニを罷ニり歸ニれば君ニも御寢所ニに入

らせ給ニばおのおの退出ニ申しけりニ申入ニ狂言ニ



静ニにいニあられ

ワキ詞 確カリメ

しかニに申ニし上げぬ唯今ニ土佐が宿所ニ

を見ニせて遣ニはぬ處ニに幕ニの内ニには

矢ニを負ニひ弓ニを張ニり兵ニども皆物ニの具ニ

を。唯今ニ打ニつ立つニ氣色ニ見ええて更

に物ニ詣ニでの氣色ニは見えぬ由ニ申しぬ

判官 サラリ

もニとよりの覺悟ニの前ニなればニ何程ニの

事ニのあるニまニごとニとニそのまニやがて

ワキ上ニ確カリ

拍子ニ合ニ



中門の廊に去る給ひ



後シテ立衆上  
一セイ  
拍子三合ハズ

静は著背長まら  
 する 義經これと召されつ 御佩刀を取つて  
 經これと召されつ 御佩刀を取つて  
 中門の廊に出で給ひ  
 門を開かせ諸共に寄せ来る勢を  
 侍ら給ふ寄せ来る勢を侍ら給ふ  
 白波とよそにや聞かんわたづみの

後シテ名来



深き心はあるものごと 其の時正尊  
 駒つしづと打ち寄せて 大音上  
 げて名のあるものごと 其の時正尊  
 鎌倉殿の御使 土佐正尊とはわが  
 事なり 九郎大夫判官殿の討手  
 の大将たまはつたり 疾う疾う御  
 腹召されよと 大音上げてぞ呼ばは







姉和カニテサラリ

ものその者にあらねども。正尊が  
 内に名を得たるカニ上ラニラカハ陸奥の國の住人  
 に。姉和の平次光景なりと。大音上  
 げてそ名のりけるワキ詞キ強クげにゆしく

も名のあるものかな。そそはははは佐

が郎等。われには不足の者なれども。  
 志をば報せんホオとホオ長刀やがて取り

カニ上ラニラカハ

同ナハケテ



正尊の尊は

直し。長刀やがて取り直し。無慙や  
 汝。手にかけんと。こむ長刀を打ち  
 拂ひ。受け流せば。又とり直し。あやう  
 とおてば。はつたと合はせ。重ねて打  
 つに。打ちこまれて。何かはたまらん  
 幹竹割に二つになつて。そ失せに  
 ける。心尊これと見るよりも。正尊





御座おつゝあ敗ひりま

これを見るよりも。宗後の郎等數  
 輩討たせて。今は叶はと馬より  
 下り立ち乱れ入るを。義經打物とり  
 直し給ひ。隙間をあらせず戦ひ  
 給へば。静も諸共に切り拂ひ切り  
 拂ふ。心尊叶はと。引き立ちける  
 こと。辨慶追つ。め戦ひけるが。押し  
 こと。

並むずと組みえいやと投げ伏せ  
 大勢取りこめ。縄打ち懸けて。悦び  
 勇又囚人を引かせ。虎門の内にぞ  
 入り給ふ



# 卷 絹

阿彌清次作

曲 四番目(略三番目) 略初節  
季 十二月  
種 三  
所 紀伊國東牟婁郡熊野本宮

## 梗概

時の帝御靈夢によりて、熊野權現に千疋の卷絹を納めよと仰せ出だされ、官人(ワキ)は諸國よりこれを調達せしめたるが、都より参るべき卷絹のみ遅延したれば、未だ奉納の運びに到り難し。さて都より使に立ちたる男(ツレ)は熊野に着くや、まづ音無天神に詣で、冬梅の匂へるをめでて一首の和歌を詠じ、天神に奉りて、やがて官人の許に來る。官人その期日に遅れたるを怒り、これを縛しめて罪に當てたり。折しも一人の女神子(シテ)出で來り、この男は昨日音無天神に立ち寄り、和歌を詠みてわれに手向けしものなれば、繩を解くべしといふ。官人怪しみて、男に歌の上句を問へば、「音無にかつ咲きそむる梅の花」といひ、神子後を承けて、「匂はざりせば誰か知るべき」と下句を繼ぎし程に、疑ひ晴れて繩を解く。神子は悦びて和歌の徳を説き、祝詞を上げて神樂を奏せしが、その半ば、神がかりとなりて狂ひ躍り、舞の手を盡したる後、狂ひ覺めて本性にたち歸る。

## 謡ひ方

餘り品位に過ぎぬ様、清くすらりと伸んびりと謡ふ。  
△シテ 朗かに伸んびりと、呼掛は大きく謡ひ出し詞を運んで「解けとこそ」と大きく確かりと「解けや」と寛たりと朗かに地へ渡し、ワキとの掛合はすべて朗らかに、サン上端は引立てて祝詞の「謹上再拜」は強吟にて閑かに「抑當山は」と氣を變へ改めて閑かに出で、次の地との掛合は朗らかに「證誠殿は」以下柔吟にて乗つて朗かに謡ふ。  
△ツレ 餘りさら／＼と謡はず、次第も何心なく出で、サンは運びよく、下歌上歌も朗かにさらりと詞の「や」は心持して以下少し閑かに「南無天滿天神」と閑かに「いかに案内申候」とさらり「今は憚り申すに」と軽く「音無に」と歌を詠するなれば少し閑める心にて謡ふ。  
△ワキ 餘り位を取らずに閑かに謡ひ出し「何とて遅なはりたるぞ」とかゝつて確かりと「汝一人愚なる」と氣を掛け手強く、されど荒くならぬ様に、以下さらりと謡ふ。



△地 初同はさらりと受け二の同「其身の科は」と強吟にて手強くさらりと段々に運びを付け「解けや手櫛の」と調子をうつきりと引立て、「元より正直捨方便の」とさらりと出でクリはさらりと大きく、サシは運びを付け、クセは開かに出で上端は引立て、朗らかに「されば御嶽は」とさらりと受け「有難や」と大きく誦ひ閉め「不思議や」より乗つて引立て花やかにさらりと、切の地との掛合は氣の抜けぬ様に浮きやかに「御幣も亂れて」より位進んで「云ひ捨る」とづゝと閉め「聲の内より」と調子改めて、極開かに朗らかに誦ふべし。

能の異式(小書)

替裝束 — シテの裝束が、小立烏帽子に腰巻、長絹となり、梅の枝に幣を付けて持つ。神樂も替り、切に緩急ありて脇の留となる。

語釋

巻絹 — 正の絹を巻きたるもの。  
三熊野 — 和歌山縣紀伊國東牟婁郡、熊野神社のこと。  
都のてぶり — 風俗のことにて、都の人情風俗に違さからぬ程の近き國。

紀の關 — 和歌山縣紀伊國海草郡山口村、昔時白鳥の關と稱す。  
普無の天神 — 熊野本宮熊野座神社の末社なり、明治二十四

年三月十津川大洪水にて本社移轉以前、即ち今の舊社地大齊の原に本社ありし時には、其東北隅に、地主祠と並びしも、今は舊本社址の石祠中に合祀さる、社記に普無天神は少彦名命を祭るとあり。  
思ひ連ねて — 歌を詠みたる事。  
納受あれば神心 — 歌を神慮に納受し給へば、下人の心も下人のものならずとの意。  
少し涼しき三熱 — 神にも日に三度熱にて苦しめられ給ふことある由をいふ。  
人倫心なし — 人間は勅院に違へんなどの心更になしとの意  
この手 — 下人の手。

岩代の松 — 和歌山縣紀伊國日高郡にあり。萬葉集第二卷挽歌、有馬皇子自傷結三松枝一歌に「岩代の濱松が枝を引き結びまさきくあらば又かへりこん」とあり。同上、長忌寸意吉麻呂見三結松哀咽歌、二首「岩代の岸の松が枝むすびけん人は歸りて又見けんかも」。「岩代の野中に立てる一つ松こゝろもとけず古へ思ほゆ」とあり。  
仇心 — 浮薄なるもの。

總持の義 — 梵語陀羅尼(ドハーラニー)は總持と譯す、一字の中に無量の教文を總攝し、一法の中に一切法を任持し、一義中に一切義を攝し、一聲中に無量功德を藏するが故なり

或は遮持と譯す、見、思、塵沙、無明等の諸惡を離遮して、法身、般若、解説等の衆徳を持達するが故なり。即ち陀羅尼は、佛菩薩の説き給へる咒語にして、萬徳を包藏する語なり其諸佛不可思議の密語なるの故を以て、これを支那の禁咒等の法に擬して咒と名づく。其如來眞實の語たるの故を以て、又眞言ともいふ。既に咒語なるが故に、これを誦すべく、これを解すべからず、故に一切諸種の陀羅尼は、翻譯せられざるなり。陀羅尼に種類多し、大智度論に、開持、分別、入音聲の三種を擧げ、法華經陀羅尼品に、旋、百千萬億施、法音方便の三種を説き、瑜伽師地論に、法、義、咒、忍の四種を明せり、即ち和歌は日本の陀羅尼なりと佛者は説く所以なり  
三難耳絶えて — 地獄、畜生道、餓鬼道の苦しみも耳を離れて自ら心清深となること。  
寂念閉靜の床 — 俗念を去つて氣靜まり魂定まること、即ち三昧のこと。  
本有の靈光 — 我等衆生が本來有する覺體にして、自性清淨の心體をいふ。この覺體の性は美明にして、因縁によりて成れるものにあらず、自然的のものにあらず、本來吾曹の想念を離れて、虚空界に等しく、處として偏せざるはなし。起信論に、「法界一相、即是如來平等法身、依此法身説名本覺」とあり。本覺は即ち靈光なり、迷の眠眼を去りて、心

中の靈光再び明らかなるをいふ。  
自性の月 — 吾曹の本性を月に譬ふ。  
婆羅門僧正 — 名は菩提摩那(ボドヒセーナ)南印度、迦毘羅衛國の人、婆羅門種はり、文殊菩薩を拜し奉らんとて、小舟に乗じて遙かに支那に航し、五台山に詣し、更に天平八年七月日本に來る。時に僧行基あり、聖武天皇に奏して、この聖僧を迎へんと請ふ、乃ち三僚と共に難波津に到り、海濱に樂を奏して之を待つ、聖僧小舟に乗りて來る、行基迎へて手を執り、談笑すること舊友の如し、伴ひて奈良に入り、大安寺の東坊をその旅館となす。天平勝寶元年の冬、東大寺の大佛成るに際し、この梵僧詔勅を受けて開眼導師となる。同三年四月、僧正に任ぜらる、こゝに於て婆羅門僧正と號するに至る。天平寶字四年三月遷化す。清浦袋草紙四卷に「行基菩薩、婆羅門僧正の手を執り「靈山の釋迦の御前に契りて眞如くちせず逢ひ見つるかな」と詠歌すれば、僧正の答歌に「伽毘羅衛に共に契りしかひありて文殊の御顔あひ見つるかな」とありし」とあるを引用す。行基菩薩は文殊菩薩の化身なるが故にかくいふなり。  
唯一實相、唯一金剛 — 天地法界一切の諸法、悉くこれ絕對の眞理、即ち眞如實相法堅固なりとの意。  
行基菩薩 — 奈良朝の人、法相宗の大徳、俗姓は高志氏、和



泉國大島郡に生る、生れてよく言ひ、稍長じて郡童と戯るも、常に佛事を模す、十五歳藥師寺に入りて出家し、新羅の慧基法師に侍して、瑜伽、唯識を學び、義淵僧正に従ひて智證を益し、また徳光法師に就いて具足戒を享く、常に都鄙を周遊し、或は橋梁を架し、或は池塘を作り、以て庶民を饒益することに努力す。天平十五年聖武天皇、東大寺を建立し、大佛を鑄造し給ふや、勅を奉じて、伊勢の大廟に神意を窺ひ更に諸國を動化して、大に輔佐するところあり、天皇、嘉賞し、ために封戸を賜ひ、陞して大僧正に任す。天平勝寶元年正月、天皇、皇后と共に行基に就きて菩薩戒を受けたまふ、依りて特に勅して菩薩の號を賜ふ。同年二月二日菅原寺東南院に寂す、壽八十二。

靈山 — 靈鷲山のこと、釋迦世尊の説法せし山。

文殊の御願を — 行基菩薩は文殊の化身なればいふ。本朝高僧傳六十四に「當時稱爲文殊之應化、則聖武皇帝始賜大菩薩誠符本地風光者也」とあり。

神は出雲八重垣 — 素盞鳴尊、出雲の國にて稻田姫を娶り給ひし時の歌に「八雲たついづも八重垣つまごめに八重垣つくる其八重垣を」と詠ぜらる。

かたそぎの — 新古今集第十九卷神祇歌に載す、住吉明神の御歌に「夜や寒き衣や薄きかたそぎの行きあひの間より霜や

おくらむ」とあり。歌意は、寒さが身にしみて寝られぬは、夜の寒い故か、又衣の薄いためか、多分屋根の壊れた所より霜が降りかゝるためなるべしとの意で、社殿の荒破するを憂へた當時の状況なり。

神を上げ申され — 憑り移りたる神靈を天に歸し上ぐるなり法性國の異 — 佛の居る國の異の方。

金剛山 — 佛教に説く所の地球の外を圍むといふ山をさす大峰 — 吉野山の金峰山のこと。

金剛界の曼荼羅 — 金胎兩界曼荼羅は、眞言宗義の最も樞要なる部分を占有するものにして、具さには、金剛界曼荼羅(ワジラダーツ、マンダラ)、胎藏界曼荼羅(ガルブハコーシヤダーツ、マンダラ)の兩部といふ。金剛界は、除障成身の曼荼羅にして大日如來、自受法樂の徳相を示し、胎藏界は化度衆生の曼荼羅にして大日如來、他受法樂の徳相を示す。又金剛界は佛果の徳を示し、胎藏界は佛因の徳を示す、去れば御嶽と熊野と相違することをいふなり。

證誠殿 — 熊野の本宮。阿彌陀如來を本尊とす。

十惡を導き — 殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、嗔恚、愚痴をいふ。

五逆 — 一に父を殺し、二に母を殺し、三に阿彌漢を殺し、四に佛身より血を出だし、五に和合僧を破るをいふなり。

中の御前は — 中殿には藥師如來を本尊とす。

### 間狂言

ワキの從者

(シカク) 御前に候(シカク) 長て候。○(シカク) 案内とは誰にて渡り候ぞ(シカク) さあらば其由伺ひ申さうする間。それに暫く御待ち候へ。如何に申上げ候。都より巻絹を持ちて参りたる由申し候(シカク) 心得申し候。其由申して候へば。かろく御通り候へとの御事に候。○(シカク) 御前に候(シカク) 長て候。がつきめ通がすまいぞ。○(シカク) 御前に候(シカク) 長て候。





# 卷絹

素誼座席順  
ワシツ  
キテレ

作 物	シ	ツ	ワ	駿 東 附 (卷絹)
	子	男	大 臣	
卷絹 幣	面、増髪 鬘 鬘帯 前折烏帽子 襟白赤 着附摺箔 緋大口 白水衣 縫腰帯 木綿襷 黒骨妻紅扇	直面 襟淺黄 着附無地熨斗目 白大口 掛素袍 繡紋腰帯 男扇	風折烏帽子 着附厚板 白大口 長絹又ハ單狩衣 繡紋腰帯 扇	

ワキ大臣詞 引立テ寛クリ



「そもそもこれは當今には奉る臣下  
なり。さうてもわが君あらたなる靈夢  
を蒙り給ひ。千足の卷絹を。三熊野  
に納め申せとの宣旨に任せ。國がより  
卷絹を集めぬ。さる間都より卷るべき  
卷絹遅なけりぬ。奉りてははる神前



ツレ次男



に納めばやと存ツレ男上トハ今次男を始サテめの  
 旅タビ衣イ今イマを始ハジメめの旅タビ衣イ紀キの路チにい  
 ざや急イソがクん都ミヤコの辛ツラふりなりとて  
 も。旅タビは心ココロの安やすかるべまか。殊こと更さらこれは  
 王ミカド土ツチの命イノチ重おも荷かをかぐる南ミナミの國クニ聞きく  
 だに遠とほまき千里せんりの濱ハマ邊ヘ山やまはた苦くる路ぢの  
 さかさきまをいつつかは越こえん。旅タビの道ぢ

休やすらし間まもなまき心こころかななこれとても  
 君きみの惠めぐみ及およびによりも候れど麻あ裳さよい  
 紀キの關せき越こえて遠がと紀キの關せき越こえ  
 て遠とほがと山やま又また山やまをそころも分け  
 つ行いけばはこれぞその今いまぞ始めて三  
 熊くま野の山やまに早く着きにけり山やま  
 に早く着きにけり急いそぎの程ほどに三熊

巻四

詞



南無天滿天神



野に着まうてい。まづまづ音無の天神  
 へまらばやと思ひい。や。冬梅の白心の  
 聞えい。いつくにかゆるんげにこれなる  
 梅にてい。この梅を見て何となく思  
 ひ連ねてい。南無天滿天神。心中の願  
 ひを叶へて給はりい。へと神に祈り  
 の言の葉を。心の中に手向けつ。急ぎ

をりてまづ君には申さん。いかに  
 案内申しい。都より巻絹を持ちて  
 参りてい。何とて遅なはりたるぞ。そ  
 の為の日數を定め。参るなかに汝人  
 おろかなる。その身の科はのがれじと  
 その身の科はのがれど。やかて縛め  
 あらけなき。参りて見せて目の

巻

巻



あたり。罪の報いと知らせけり罪の  
 報いと知らせけり。なうなうその  
 下人をば何とて縛め給ふぞその者  
 はまの音無の天神にて。一首の歌  
 を詠みわれに手向けし者なれば。納  
 受あれば神慮。少し涼き三熱の  
 苦しみと免る。そのみか人倫心なし。

○小菰



その手を見れば

詞  
 その縄解けとこそ解けや手櫛の  
 乱れ髪。解けや手櫛の乱れ髪。の  
 神は受けずや序は連の縄の引ま  
 立て解かんとこの手を見れば心  
 強くも。岩代の松の何とか結び  
 なさけなや。これはさて何と申し  
 たる御事にてゆぞ。この者は音無の

巻首

四



天神にて。一首の歌を詠みわかれに手  
向けし者なればとてとて縄と解き  
給へワキナラリこれは不思議なる事と承り  
ものかな。かほど賤しき者の歌など  
詠むべき事思ひもよらず。いかさま  
にも疑はしき神慮かと存じゆよ  
シテカマツテなほも神慮を偽りイッハとや。とあらば  
西カニ

かの者昨日わかれに手向けし言の葉の  
上の句をかれに回ひ給へ。われ又下  
の句をば續ツツぐべしワキナラリこの上はとかく申  
すに及ばず。いかに汝真マコトに歌を詠み  
たらば。その上の句と申すべしツツカレ上ホ。今イマは  
惴ハバり申すに及ばず。かの音無ナの山  
陰カゲに。さも美ミしき冬梅フユウメの色殊コトなり



何を何となく心も深みてかくばかり。  
 音無にかつ嘆き初むる梅の花句は  
 ざりせば誰か知るべきと。詠みしは  
 疑ひなきものを。同上。正直  
 捨方便の誓ひ曇らぬ神慮すぐ  
 なる故にかくばかり。納受あれば今  
 ははや疑はせ給はで教人を。宥さ



○サニ曲獨吟  
○切迄雅子

せ給ふべし。または心中に隠し歌も  
 神の通カと知るなれば。疑ひの  
 あだ心うち解けこの縄をどくどく  
 ゆるし給へや。それ神は人の教ふに  
 よつて威をまし。人は神の加護に  
 よれり。されば樂しむ世に逢ふ事。  
 これ又總持の義によれり。言葉



すくなくうして理を念み三難耳絶えて  
 寂然閑静の床の上には眠り遙かに  
 眼を去る（中）これによつて本有の靈  
 光忽ちに照らして自性の月漸く雲  
 をよまされり。首を詠すればよろづの  
 悪念を遠ざかり天を得れば清く  
 地を得れば安しあらかげめ唯有一

○仕舞



佛の御舞

實相唯一金剛とは説かずや（明）これば  
 天竺の（同）婆羅門僧正は行基菩薩  
 の清手を取り靈山の釈迦の清もと  
 に契りて真如朽ちせず逢ひ見  
 つと詠歌あれば返歌に伽毘羅  
 衛に契りし事のかひありて文殊  
 の清顔を拜むなりと互に佛々を



シテ祝詞



顕すも和歌の徳にあらずや又神は  
 出雲八重垣片そまきの寒き世のた  
 めいはずとも傳へ聞きつべし神の  
 甲位元イイトニユル  
 めゆふ系櫻の風の解けとぞ思は  
 る。ワ羊詞サラリ  
 る。○。○。○。あらば祝詞をさそらせられ  
 ひひて神をよげ申されし  
 再拜。そもそも當山は法性國の  
 シテ上 明カニ  
 謹上

同上

巽金剛山の靈光この地に飛んで  
 靈地となり。今の火峯されなり  
 されば清寂は金剛界の曼陀羅  
 シテ 明カニ  
 華藏世界熊野は胎藏界 同サ  
 淨土ありがたや 神樂 寺上寺迄 拍子合  
 祝詞の神子物狂。不思議や祝詞の  
 神子物狂のさもあらたなる。飛行を

巻二

八



出だして神語りすること。恐ろし  
 けれ。證誠殿は阿彌陀如来十悪  
 を導き五逆を憐む。中の前は  
 薬師如来。薬となりて二世を助  
 く。一万支珠。三世の覺母たり。  
 十萬普賢。滿山護法。數々の  
 神々の巫につくも髮の流幣も



翔りかひりて



神はあがらせ給へ

乱れて空に飛ぶ鳥の翔り翔りて  
 地に又躍り。數珠を揉み袖を振り。  
 擧足下足の舞の手をつくれ  
 までなりや。神はあがらせ給へ  
 いひ捨つる聲のうらちより狂ひ覺  
 めて又本性にぞなりにける。



# 花月

世阿彌元清作

曲 初 四番目(略二番目)  
季 節 二 月  
種 古 三 飯  
所 京 都 洛 東 清 水 寺

## 梗概

筑紫彦山の麓に住む左衛門(ワキ)といふ人、一子を持ちしが、その七歳の春行方知れずなりたれば、これを出離の機縁と思ひて出家の姿となり、諸國を修行して都に上り、清水寺に詣でて花を眺む。折しも、花月(シテ)と名乗る年若き喝食僧、弓矢を携へて出で來り、門前の者(狂言)と戯れて小歌を誦ひ、又花踏み散らす鴛を射んとして、自らを古の養由に比し、事々しく構へ狙ひしが、殺生は佛の戒めなればとて思ひ止まり、この度はまた清水寺の曲舞を誦ひて、觀音の靈驗を述ぶ。左衛門なる僧つくづくこれを見て、わが子なることに気づき、その素性を尋ねて、親子の對面を遂ぐ。花月喜びて、門前の者に勧めらるゝがまゝに羯鼓を打ちて舞ひ、更に鷲を擦つて、七歳の時天狗にとられてよりこの方、筑紫の彦山、讃岐の松山、伯耆の大山等、諸國の山々を遍歴したる次第を語りたる後、父とうち連れて佛道修行の旅に赴く。

## 誦ひ方

少年の喝食物なれば全曲さらりと粘らぬ様に誦ふ。  
△シテ 何事なくさらりと朗らかに誦ひ出し「冬は火」と抑へ「來し方より」と閑かに「鴛の花踏み散す」とさらりと朗らかに、以下文句に心付け「荒面白や」と引立て、軽く「易き事」と氣を變へさらりと出でサシ上端はさらりとクセ後のワキとの掛合も何事なくさらりと「七つの年天狗に」と大きく地へ渡す。  
△ワキ 位を重く取らず旅僧とてさらりと誦ひ、シテとの掛合はシテの位を取らぬ様に誦ふ。  
△地 初同の小歌は類なき一節にして、細かき節並に抑揚多ければ注意して始めは閑かに出で、段々と運びて軽く誦ふ「夫は柳是は櫻」は弓の段とて調子を引立て、花やかにさらりと「いで物見せん鴛」と閑め返しより元へ戻し、サシはさらりとクセは閑かに出で段々と運びを付け、上端よりは引立て、朗らかに「とられて行し」とたつぷりと大きく受け、返しより

花月



は氣を全然變へて閑かに出で段々と運び「扱京近き山々」より氣を變へさらりと讀ふべし。

語釋

彦山 — 豊前、豊後、筑前三國に跨れる高山、天狗の住むといひ傳ふる山。

春は花夏は瓜秋は菓冬は火 — 何れも字音クワなればいふ。一句のために — 因果を説ける經文一句のためにといふ意か又は一空にて生涯の意か經文に三界は唯一空など説きあればなり。

かうそ — 善嚴宗の祖師香象大師をいふ、印度の人、今花月のいふ言が其旨に合ひたれば比していへるなり。

雲居寺 — 京都市の東山祇園社の南に昔時ありしといふ寺、承和四年の建立にして、現今の高臺寺の地なりと云ふ。

鶯の花踏み散らす云々 — 用捨箱に、古き俳諧の附合に「鶯の花ふみ散らす細腰を大長刀でさぶと切らばや」とありといへり。

養由 — 周の代の人、史記に「養由基善射、去柳葉百步、射之百發百中」とあり。

大口のそばを高くとり — 大口は榜の名、その稜目の所を引きからぐるをいふ。

殺生戒 — 生類を殺すなといふ佛教の法律。

枯れたる木にも花咲く — 古今著聞集第六卷に、「いづれの佛の願より千手の誓ぞ頼もしき、枯れたる草木も、忽ちに花咲き實のる」とあり。  
御所變 — 化現に同じ。  
四王寺 — 四王寺山といふ、筑前國筑紫郡宇美村にあり太宰府の西方の山。  
松山 — 綾歌郡にあり。  
白峰 — 松山の高峰を云ふ。  
大山 — 西伯郡にあり。  
鬼が城 — 丹波國天田郡と丹後國加佐郡とを擧する山。昔時鬼の棲みたる物語あるためにいふ。  
天狗よりも — 鬼の恐ろしさは、天狗より優るとの意。  
愛宕の山 — 京都の西北方にあり。  
比良のの峰 — 近江國の比良をいふ。  
比叡の大嶽 — 比叡山の頂上四明嶽をいふ。  
少し心のすみしこそ — 比叡山に住みしとき、心の澄みたるやうに覺えしは、横川の夜景色なりしとの意。  
よそにのみ云々 — 新古今集第十一卷戀歌に載す、讀人知らずの歌に「よそにのみ見てや止みなむ葛城や高間の山の峯のしら雲」とあり。歌意は、我が思ふ人に遂に遇ふこと能はずして、葛城の高間の山の峰にかゝる白雲を他所にばかり見て

三十三身の秋の月 — 平治物語に「誠に三十三身の春の花匂はぬ袖もあらじかし、十九説法の秋の月照さぬむねもなかるべければ、さすが千手千眼あはれとは見そなはし給ふらん」とあり。三十三身とは、法華經第八卷普門品第二十五に、觀世音、衆生の器に隨ひ、佛身、辟支佛身、聲聞身、梵王身、帝釋身、自在天身、大自在天身、天大將軍身、毘沙門身、小王身、長者身、居士身、宰官身、婆羅門身、比丘身、比丘尼身、優婆塞身、優婆夷身、長者婦女身、居士婦女身、宰官婦女身、婆羅門婦女身、童男身、童女身、天龍身、夜叉身、乾闥婆身、阿修羅身、迦樓羅身、緊那羅身、摩睺羅迦身、人非人身、執金剛身の三十三身を現じて説法し給ふをいふなり。  
楊柳觀音 — 三十三觀音の一、衆生の願望に従ひて慈悲心を垂れ應同して化益すること、恰も柳枝の風に靡くが如しとの意味より名づく。其形象は身色、相好等常の如しと雖も、右手に柳の枝を持ち、左手は乳上に當りて大悲悲、施無威の印を結べり。  
千手觀音 — 大悲觀音ともいふ。六觀音、七觀音の一で、千手千眼觀世音菩薩の略。千手は、同時に限りなき働作を成し千眼は、同時に一切の事理を知照するこの菩薩の自在神力を示す。二十七面千手千眼あり（實は四十二手）殊に地獄の苦惱を濟度し、又諸願成就、產生平穩を司る。

暮すことか。と譬へて言へることにて、我が思ふ人に逢ひ難きを嘆息した意である。  
葛城や高間の山 — 大和國と河内國との境にあり。  
山上 — 吉野山の奥をいふ。  
大峰 — 前に同じ。  
釋迦嶽 — 大峰山の南方にあり。  
ささら — 二つの竹を磨り合せて、歌の拍子を助くる器。舞うては數へ — わが經歷を數ふるなり。

問狂言

清水寺門前の者、ワキの所望により花月を呼び出し、いろくおとこ應答せりふあり。  
(ワキ) 誰にて渡り候ぞ (ツキ) さん候。都の事なれば面白き事のうち讀きある時も候が。折節今は御座ないが。何をがな見せ申さうやれ。いやお目に掛けう物が御座る。こゝに花月と申す喝食かつしの。小歌を讀ひ色々面白う御狂ひ候間。是を呼出し見せ申さうする (ツキ) かうく御通り候へ (ワキ) 如何に花月へ申す。とうく御出でありて。花の下にて御遊び候へや。〇何とて今日は遅く御出で候ぞ (ツキ) さあらばいづもの小歌を聞きませう。〇いやこゝな花に目があるよ。漸おとこ漸見れば小鳥ちや。急いで此由を申さう。如何に申し。鶯が花踏み散らします (ツキ) それを弓にて遊ばされ候へ。〇



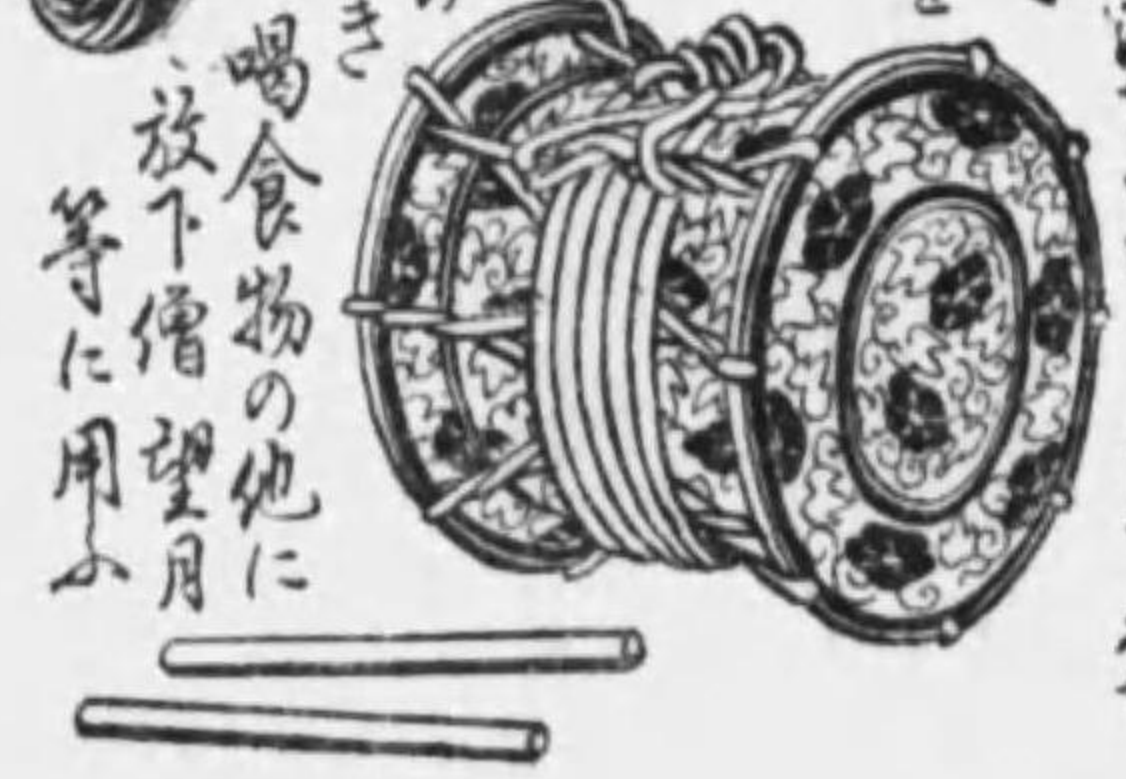
尤もで御座る。さあらばいつもの地主の曲舞を誦はせられや  
 ○なうく方々は御出家の身にて何時子を持たせられたぞ  
 (シカク) 何と俗にて失はれし御子息ぢや。けにと仰せらるれ  
 ば瓜を二つに割つた様に御座る。さあらば此程おろきなされ  
 れた山々を。懇に御物語りあり。其後羯鼓を打ち。連れ立ち  
 都へ御歸り候へや。



喝食髪



喝食の面を  
若くらくとき圖の如く  
髪を信ふなり



羯鼓 金の泊を置き、彩色あり  
撥りも心泊を置く。シテ之を  
つけて  
舞ふ

本曲の  
如き

喝食物の他に  
放下僧望月  
等に用ふ

喝食 喝食はもと  
佛家の少年の義  
行にて  
その面また幸ふ  
表意を白とす  
本曲の外自然居士  
東岸居士等に用ふ

装束附(花月)

小道具	作物	餅	シ	ワ
		清水寺門 前ノ人	テ 花 月	キ 備
羯鼓	弓矢		面、喝喰 喝喰髪 前折烏帽子 襟淺黄 着附厚板 白大口 水衣 繡紋腰帶 扇	角帽子 着附無地鬘斗目 水衣 緞子腰帶 扇 數珠



花月

素謡座席唄

ワシキテ

<sup>ワキ僧上</sup>スラリ  
<sup>次</sup>風<sup>ヨク</sup>に<sup>ト</sup>任<sup>カ</sup>する<sup>ヲ</sup>浮<sup>カ</sup>雲<sup>ノ</sup>の<sup>ト</sup>風<sup>ニ</sup>に<sup>ト</sup>任<sup>ス</sup>する<sup>ヲ</sup>浮<sup>カ</sup>  
<sup>拍子三合</sup>雲<sup>ノ</sup>の<sup>ト</sup>ま<sup>リ</sup>は<sup>ト</sup>い<sup>づ</sup>く<sup>ト</sup>な<sup>る</sup>ら<sup>ん</sup>

詞サラリ

これは筑紫彦山の麓に任する  
 僧に。われ俗にていひし時子を  
 人持ちていせと七歳と申しし春の頃。  
 いづくともなく失ひてい程に。これを







火一字六稍確カト  
誦フ

と申す者なり。或人わが名を尋ね  
しに答へて曰く。月は常任に  
に及ばず。とてわの字はと問へば。  
春は花夏は瓜秋は菓冬は火因  
果の果をば末後まで。一句のため  
残すといは人それと聞いて。さては  
末世のかうそなりとて天下に隠れも

○小菫

なき花月とわれを申すなり。何とて  
けよは遅く御出でいぞ。さんば  
今までは雲居寺にゆひが。花に  
心を引くらの春の遊びの友達と。  
申違はしとて笑りたり。言は  
らつもの如く小歌を謡ひて御遊び  
ゆ。来方より。今世までも

絶句

狂言



小歌の中



神楽

絶えせぬものは恋とりけるもの。  
 げに恋はくせもの。くせものかな。  
 身はさらさらさらさらさらさら  
 に恋こそ寝られぬ。あれは賢い  
 鶯が花を散らさぬ。げにげに  
 鶯が花を散らす。よ。某射て落し  
 ゆはん。急いで遊ばす。鶯の

花踏み散らす細腰を。大長刀もあ  
 らばこそ。花月が身に敵のなれば。  
 太刀刀は持たず。弓は的射んがため。  
 又かゝる落花狼藉の小鳥をも射て  
 落さんかためぞか。異國の養由は。  
 百歩に柳の葉をたれ。百に百矢を  
 射るに外さず。われは又花の梢の

神楽

百



鶯と射て落さんと思ふ心はその養

由にも芳るまし拍子合あらおもろや

それは柳それは楊それは雁がね

これは鶯それは養由それは花月

名こそかはるとも弓に隔てはよも

あらどいでもの見せん鶯いでももの

見せん鶯とて履いたる足駄を踏ん

いづもの見せん



はいたる足駄を踏んぬと



花の本蔭に狙ひうつて



殺す戒をば破るまじ



睨いで大口のそばを高く取り持

衣の袖をうの肩ぬいで花の本蔭に

狙ひ寄つてよびまきひやうと射は

やと思へども佛の戒め給へ殺生

戒をば破るまじ。言語道断面白

き事と仰せられぬまた人の處所

望にても當寺のいはれを曲舞に



作りて御謠ひゆ由を聞しめして。

一節御謠ひゆとて所望にてゆ

易き事謠うて聞かせ申さうする

にてゆ サシ上 さればにや大慈大悲の春

の花 同 十悪の里に香しく三十三

身の秋の月五濁の水に影清

○仕舞 拍子合 ともともこの寺は坂の上の田村丸



源朝臣の御舞

大同二年の春の頃草創ありしこの

方今も音羽山嶺の下枝の滴りに

濁るともなき清水の流れと誰か

汲まざらん或時この瀧の水五色

に見えて落ちければそれを怪しめ

山に入りその水よを尋ぬるにこん

ぶゆせんの岩の洞の水の流れに



埋もれて名は青柳の朽木あり。  
 その木より光さる異香四方に薫ず。  
 れば疑ふ所なく揚柳観音の御所愛にてましますかと。  
 皆人手を合はせなほもその奇特  
 を知らせてたゞと申せば朽木の  
 柳は緑をなす櫻にあらぬ老木



白妙に花咲きけり

まで皆白妙に花咲きけり。  
 千手の誓ひには枯れたる木にも  
 花咲くと今の世までも申すなり。

万詞

あら不思議やこれなる花月をよよく  
 よく見ゆへは某が俗にて失ひし子  
 こそはいかに名のつて違はざやと  
 思ひゆかに花月に申すまじ事ゆ



シテサラリ

何事にていぞ ワキカツテ 御身はいづくの人



にてわたりのいぞ シテサラリ これは荒紫の者

にてい ワキカツテ 何故かやうに諸國を



御廻りのいぞ シテサラリ われ七つの年彦山に

登りのいひ シテサラリ が天狗にさられてかやう

に諸國を廻りのい ワキカツテ 何うては疑ふ所

もなり。これこそ父の左衛門よ見

忘れてあるか 狂言 なうなう御僧は

何事を仰せられいぞ ワキカツテ 何んがこの

花月は某が俗にて失ひ子にてい

程に。さうかやうに申しい 狂言 げにと

御申しいば底を二つに割つたるやう

にていこのよはいつもの如く八撥を

御打ちいひてうちつれたつてを里



御歸りミテ引立テスラリ  
山に登りカミ上カミカツテ

七つの年天狗シツノトシテウにトとシられ

て行きイ山ヤマをヲ思オモひハやるルことヲ悲カし

けれシ獨ヒツ鼓ツ打ヒ上ウ拍ヒ子コ合ガ奏ソウ中チュウ明メイカカ鏡キョウ々々薄ハクシシ付ツけ

ひヒやるルことヲ悲カしシけれシまマづズ筑ツク紫シには

彦ヒコのノ山ヤマ深フカきキ思オモひハをヲ四シ王ウ寺ジヤウ讚サン岐キ

には松マツ山ヤマ降クワりリ積ツクむム雪ユキのノ白シロ峯ミネをヲこスて



降つむ雪の白峯

○仕舞



さて伯耆には大山



天狗よりも恐ろしや



月の横川の流れ

伯耆ハクキにはニ大ダイ山サンをヲこスてテ伯耆ハクキにはニ大ダイ山サン

丹後タニ丹波タニのノ境サカイなるル鬼オニがガ城シヤウとト聞キき

はハ天テン狗クよりリもモ恐オソろロしシやヤをヲこスてテ京キョウ

近チカきキ山ヤマ々々をヲこスてテ京キョウ近チカきキ山ヤマ々々をヲこスてテ京キョウ

山ヤマのノ古コ郎ラウ坊ボウ比ヒ良ラのノ峯ミネのノ次ジヤウ郎ラウ坊ボウ

名ナ高タカきキ比ヒ叡エのノ大ダイ嶽タクにニ妙ミウしシ心シンのノすスみ

しシこコそソ月ツキのノ横ヨウ川カハのノ流リれレなナれレ日ヒ頃キマは





富士の高嶺にあがりつ



すつては舞ひ

よそこのみ見てや止みなんと眺めし  
 に葛城や高河の山山上大峰釋迦  
 の嶽富士の高嶺にあがりつ雲に  
 起き臥す時もありかやうに狂ひ  
 めぐりて心乱るるささらさら  
 さらさらとすつては謡ひ舞うては  
 數へ山々嶺々里々をめぐりめぐりて



今よりささら



あれなる御僧に



あの僧に逢ひ奉る嬉しきよ。今  
 よりこのささらを捨てさるは  
 あれなる御僧につれをらせて佛  
 道つれをらせて佛道の修行に出  
 づるぞ嬉しかりける出づるぞ嬉し  
 かりける。



鍾 馗

關竹氏信作

梗概

唐土終南山の麓に住居する者（ワキ）奏聞すべき事ありて、帝都に赴きたる途次、後より呼び留むる者（前シテ）あり。何事ぞと問へば、われは悪鬼を亡ぼして國土を守らんとの誓願あり、君もしこれを信敬し給はば、宮中に現じて奇瑞を見せ奉るべし、この事を奏し給へといふ。怪しみてその名を糺せば、われは鍾馗とて、進士の試に落第して憤死したる者なるが、その執心を翻して、後世に望みを懐けるなりといひて諸行無常生死流轉の有様を説き、いざ眞の姿を顯さんといふより早く氣色變りて、眼前に神通力を示しつゝ、山彦の如く消え去る。（中入）

旅人は奇特の思ひをなして、山中に法華經を讀誦せしに、鍾馗の靈（後シテ）寶劍を提げて出で來り、皇居を惱まし奉る悪鬼を、或は玉殿或は廊下或は御階のもとに、追ひ驅け追ひ詰めて、遂にこれをつたづたに斬り放す様を現し、この寶劍の威力によりて、國土の泰平たるべきことを示して去る。

曲 五番目 略初能  
 季 九 月  
 所 古 關 唐 土

謡ひ方

切能にして略して初能にも用ゆ。前後とも強く大きくさらりと謡ふ。重き曲には非ざれども鍾馗と云ふ人物の位を見ても軽くなるは悪し。

△シテ 呼掛は大きくはつきりと謡ひ出し、ワキとの掛合は調子を收めて閑かに「折からに」と收めて地へ渡し上端は朗らかに「とても見みえし」と手強く「氣色變りて」と確かりと地へ渡す。

△後シテ 手強く勇壯に謡ひ出し、ロンギは勢を附け確かりと謡ふ。

△ワキ 旅人なれば重く謡はず、名乗は閑かに出で道行はさらりとシテとの掛合もさらりと待謡も重くならぬ様に謡ふ。

△地 初同は物淋しくさらりと謡ひ出し、クセもしとやかにさらりと運び能く「傳へ聞く佛在世の」手強く勢を附けさらさらと謡ひ「寶劍光り」と手強くさらりと、ロンギは氣を替へ大きく健やかにさらりと謡ふ。



黒頭 — 後シテが黒頭となり位早くなる。

語釋

進士 — 唐の代には士を採用する法に二途あり、一途は生徒とて學館より取るもの、二は卿貢とて州縣より取るもの、而して皆試験あり、其科目に秀才、明經、俊士、進士の四種の階級あり、試験に合格したるを及第とす。鍾馗は進士の試験を受けて及第する際に死したるなり。

終南山 — 支那陝西省西安府西南方にあり。

三界 — 欲界、色界、無色界をいふ。

翡翠の帳 — 緑のうすものにて作れるとばり。

四手の田長 — 時鳥の異名。  
傳へ聞く佛在世の — 法華經妙莊嚴王本事品第二十七卷に「彼佛法の中に王あり妙莊嚴と名づく、其王の夫人を名づけて淨徳と曰ふ、二子あり一を淨藏と名づけ、二を淨眼と名づく、この二子大神力福德智慧あり、久しく菩薩所行の道を修せり、こゝに二子其父を念ふが故に、虚空に踊在すること高さ七多羅樹、種々の神變を虚空中に現じてまた行住座臥し、身上より水を出だし身下より火を出だし、身下より水を出だし身上より火を出し、或は大身を現じ虚空中に満たしめて又小に現じ、小にして又大に現じ、空中に滅して忽然と地にあり

り、地に入ること水の如く、水を履むこと地の如し、かくの如き神々の神變を現じ其父王の心をして淨く信解せしむ」とあり。

善道を守る — 玄宗本紀に此事あり。

一念 — 念とは、或る事物に對して心に起る思をいふ。然るに思内にあれば、色外に顯はる道理なるを以て、心に佛を思はゞ、自ら佛名を口に唱ふるに至るべし、故に淨土門に於ては、念に、心念、稱念、の二義を立つ、單に一念とありてもある場合には一時物を思ふことなり、ある場合には一度口に佛名を稱ふることとなる。また一念の一を、完全といへる意味に考へて、多意を兼ぬるの一なりと解する義あり。また一時心に思ふ、至極短き時間を表さんとて、一念の語を用ゆることあり、こゝは永久を意味する一念なるべし。

菩提心 — 梵語(ボトヒ)佛智又は佛道のことなり、或は正覺と譯す。不正、不滅なる眞如の理を證悟し、道の至極に到達する聖智をいふなり。この證悟の眞實なるに名づけて正覺といふ、即ち佛果のことなり。菩提心とは、佛果菩提を求むる心の謂にして、衆生能發の心なり、此心發起して人始めて菩提の行を修することを得るなり。天台宗には藏、通、別圓の四教の菩提心を説き、眞言宗には行願、勝義、三摩地の三種の菩提心を明かす。鍾馗の惡鬼を退治する發露はこの菩

提心をいふ。

間狂言

所の者出て、當の如くワキと問答し、鍾馗のことを物語る。

是は唐土終南の麓に住む者にて候。今日はもの淋しき折からなれば。罷り出で往來の人を見て心を慰めばやと存する。いや是はいづくより何方へ御通りあるぞ(此間せりふ常の通り)各々も偏へに御存じの事なれば。是は詳かに語り申すに及ばざれど。さりながら大方大唐の習ひには。その人の器量骨柄のよき惡しきによらず。又は老いた若いの隔てもなく。氏種姓の氣高き分もなくして。いかなる田夫野人の子なりといへども。學問の達したる者なれば。榮耀榮華高位の望みも叶ひ一類までもそれに應じて人となり。諸人に圍繞湯仰せられ。子々孫々までも。名を後代に擧ぐる故に。一在所のもの知り隣郷の司を望み。一郡の學匠は一國を心掛け。國中に名を得た儒者は及第致し。已に殿上の交りをなすにより。士農工商の家々の幼い衆も。八歳小學十五大學とは申し習はす。しかるに昔終南山の麓に。鍾馗といへる進士のありしが。幼少の時より書物を面白く思はれ。いかさま一度は學問の奥儀を究めんと。夜晝の境もなく嗜まれけるに。はや一度開きたる事は忘れず大智なる故。萬卷の書を誦んじ給ひしかば。古より儒者の用ゐ來る事と學問の道には。何を問ひかけたりとも

請まる事はあるまじきと自慢をせられ。伯父の御時武徳年中の頃。及第に上り申されし處に。類少なき才智な學匠たりとはいへど。誠に天命の盡きたる故か。及第叶はずしてそのまゝ歸りし時。鍾馗心に思はるゝやう。この年月學したる事を空しくして。故郷に歸り人に面を曝さん事。骨髄に染みて面目なうや思はれけん。なんぼう短慮なる人にて渡り候ぞ。玉階に首を觸れて死するを。忝くも帝は聞こし召して、かの者の心中餘りに不便に思し召すにより。頓て死骸を土中に込め置かれ。緑袍を贈官なされたと承る。されどもその執心今に残り。終南山に住んで年月を送り。人につき添ひ忽ち奇蹟をなすと申し習はす。先づわれ等の存じたるはかくの如くに候(シキト)是は奇特なる事仰せらるゝものかな。古の鍾馗大臣は禁中の惡鬼を鎮めんと思はるゝ折柄。方々の帝都へ赴き給ふにより。雲の上へこの事を告げ知らせ申さんとて。鍾馗の亡魂現れ出で。言葉を交されたと存する間。暫く御逗留あり。重ねて奇特を御覽あれかしと存する。



小意見 口を堅く結びあらすこと即ちもと  
 「しむの義にて  
 楮頼刮目気  
 魄充溢の相貌  
 をなす  
 本曲の外務飼  
 皇帝氷室  
 野守等の



後シテに用ふ  
 唐冠  
 後シテ赤頭の上に  
 之を頂きて出づ  
 すべて小意見の面を  
 著る曲の以外に  
 鶴亀成陽宮賀茂  
 等のシテ及び西王母  
 東方朔張良等の  
 ワキに之を冠し  
 唐人または位ありと  
 表意す

装束附 (鍾馗)		
ワ キ 人	前 シ テ 備 遣	後 シ テ 備 遣
着附厚板 白大口 側次 繡紋腰帶 扇	面、三日月 黒頭 黒地鉢巻 襟紺 着附無地敷斗目 水衣 繡紋腰帶 扇	面、小意見 赤頭 金地鉢巻 唐冠 襟紺 着附厚板 半切 袷狩衣 繡紋腰帶 劍

# 鍾馗

素謡座席順 ワキテ

ワキ名乗  
 早旅人詞 寛タリ

これは唐土終南山の麓に住居する  
 者にてい。さうてもわれ奏聞申すべき

事のい間。唯今帝都に赴きい

終南山を立ち出で。終南山を立

ち出で。野草の露を分け行けば。

遠村に煙満ち人屋ゝるき。眺望の

道行上  
 ツヨク  
 拍子ニ合



元へ戻シ  
海路遙かに過ぐれば釣の小舟  
も歸る波よる程もなき。眺め  
かなよる程もなき。眺めかな

ニテ鐘庵詞朗カニ

呼掛

シテの出

なうなうあれなる旅人に申すま  
事のは何事にていぞ  
われ昔

誓願の子細あるにより。悪鬼を七は

一國をを守らんとの誓言ひあり。君



賢人をなご給は。宮中に現し奇瑞  
をなすべまとの。この事を奏して  
たび給へ。これは不思議の御事  
かな。さうてさて御身は如何なる人ぞ  
シテ 確カリ  
今は何をか色むべき。われは鐘庵と  
いふ。進士なるが及ぶのみ。きんに七  
せ。その執心を翻し。後世になほ



シテワキの圖茶



望みありげにげにげに鐘馗の御事

は。世に隠れなき進士なるが。その

七心にてまゝますか。なかなかな

なりと夕暮の。物すまきま

折からに。草虫露に聲しをれ。草

虫露に聲しをれ。尋ねるに形なく。

老松既に風絶えて。同へども松は



○小諸

シテ

確カリノ

野

上歌同

ナツメ

ユルメ

コエ

ユラ

元へ戻シ

ナツ

ナツ

○獨吟

答へず。げにや何事も。思ひ絶えなん

色も香も。終には流はぬ花紅葉

いつをいつとか定めん。いつをいつ

と定めん。一生は風の前の雲。夢の

間に散り易く。三界は水の上の泡

光の前に消えんとす。猗。緬殿の内

には有為の悲。心を告げ。非羽。羽卒の





帳の内には有漏の願がありとか  
 や。栄華はこれ春の花。昨日は盛ん  
 なれども。今日日は衰ふわんりまの。  
 秋の光朝に増し。夕べに減すとか。  
 春去り秋来つて。花散り葉落つ  
 時移り氣色變つて。樂しみ既に  
 去つて悲しみ早く来たり。朝顔の。

花の上なる露よりも。はかなき物  
 はかけろふの。あるかなまきかの心地  
 して。世を秋風のうら靡き。群れある  
 田鶴の音を鳴きて。四季の田長の  
 一。聲も。誰が冥路を知らずらん。  
 あはれなりける人。畏をいつかは離れ  
 はつべき。これは不思議の御事



かな。急ぎ帝都に赴きつゝ委しく

奏聞申すべし。暫く侍たせ給へとよ

シテ シテ 気ヲカケ ともも見えぬ。夢の中。真の姿

を現さんと 早カル上 サラリ いより早く シテ 強クアリ 氣色

變りて 同上 傳へ聞く佛在世の傳へ

聞く佛在世の淨藏淨眼の如くに

その高さ七多羅樹虚空にあがり



○仕舞  
氣色おらうて



その高さ七多羅樹



水もふむと陸地の如くに



形はら山彦の

ては坐せしめ地に入つては火焰を

放して水も踏む事陸地の如く

に。さらさらと走り去つて形はさ

ながら山彦の形はさながら山彦

の聲ばかりして失せにけり聲

ばかりして失せにけり。○中入間

○切迫難子 ワキ上歌 待望 コケ 若の逸に法をのべ ユル 若の逸に法を





後シテの仕 拍子三合ハ六

後ニテ鐘道上

早苗

のべもすまき山陰の嵐  
 と共に聲立ててその妙經を讀  
 誦するこの妙經を讀誦する  
 鬼神に横道なるといふに何ぞ  
 だりに騒がしく汝知らずやわが  
 心國土を守る誓ひあり寶劔  
 光すまじく日月影おろそかに

けに鐘道の精霊なり



○仕舞

松崗梢を拂ふが如く悪鬼の乱れ  
 恐れ去つてげにも鐘道の精霊  
 たり拍子三合ありがたの御事やそも  
 君道を守らんその誓願の御誓  
 ひ如何なる謂れなるらん鐘道  
 及第の鐘道及第のみぎんにて  
 われとせし悪心を翻す一念發起



げに誠ある誓ひ



誓<sup>チカ</sup>提<sup>ダイ</sup>心<sup>シン</sup>なるべ<sup>ベ</sup>げ<sup>ゲ</sup>に誠<sup>マコト</sup>ある誓<sup>チカ</sup>ひ

こゝろもくに遠隔し



とて國<sup>クニ</sup>土<sup>ツチ</sup>を鎮<sup>シメ</sup>めわ<sup>ワ</sup>ま<sup>マ</sup>きて<sup>テ</sup>げ<sup>ゲ</sup>に禁<sup>シ</sup>裏<sup>リ</sup>

あつちのちのち



雲<sup>クモ</sup>居<sup>イ</sup>の樓<sup>ロウ</sup>閣<sup>カク</sup>の廊<sup>ロウ</sup>下<sup>カ</sup>の階<sup>カイ</sup>階<sup>カイ</sup>

すだくりに切放



のもともまでも清<sup>キヨ</sup>階<sup>カイ</sup>のもともまでも

この年の威光とかな



案<sup>ア</sup>の如<sup>ニ</sup>く鬼神<sup>キケン</sup>は通<sup>ツウ</sup>力<sup>リキ</sup>失<sup>シ</sup>せ現<sup>イ</sup>れ

治まる國土とかな



出<sup>デ</sup>づれば忽<sup>ト</sup>ち<sup>チ</sup>にす<sup>ス</sup>だ<sup>ダ</sup>ず<sup>ズ</sup>だ<sup>ダ</sup>に切<sup>キ</sup>り放<sup>ハ</sup>

してまのあたりなるその勢<sup>セ</sup>ひた



昭和六年六月廿五日發行

楠木與書

著者 於權所  
題 不調



昭和版

觀世流

訂正著作者

廿四世 觀世左近

發行兼印刷者

東京市神田區錦町二丁目十番地  
檜常之助

發行所

檜書店

京都店

京都市二條通越屋町東北角  
振替大阪三六一八番、電話上二九〇番



終